Osaka University Knowledge Archive

Title	江戸時代における中国近世語の受容 : 留守希斎撰『語録訳義』を通じて
Author(s)	神林, 裕子
Citation	中国研究集刊. 1997, 19, p. 90-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61105
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

江戸時代における中国近世語の受容
――留守希斎撰『語録訳義』を通じて

神林裕子
（大阪大学）

はじめに

『朱子語類』を始めとする宋明の語録の類は非常に難解である。その大きな原因の一つとして、文章中に当時の俗語を多く含んでいることが考えられる。そのため、これらの近世の俗語に関する研究や解説等が、今日に至るまで、多く著されている。

さて、日本における『朱子語類』研究の先駆者の一人として、山崎闇斎（元和三年－天和二年、一六一八－一六八二）を挙げることができる。闇斎は、林羅山（天正一一年－明暦三年、一五八三－一六五七）たちが『四書大全』を中心に朱子学の研究を進めたのに対して、『朱子語類』あるいは『朱子文集』を通じて朱子を理解しようと努めた。

本稿は、この山崎闇斎および闇斎学派の人々が、先に述べたような語録を読解する上での問題を、どのように解決していったかということについて述べる。その手がかりとして、崎門三傑の一人である三宅尚斎（寛文二年－寛保一年、一六六二－一七四一）の高弟、留守希斎（宝永二年－明和二年、一七〇五－一七六五）が編纂した『語録訳義』を取り上げる。『語録訳義』は、その名のとおり、語録読解のための手引書である。そして、同書は、宋明の俗語に始まり、江戸時代には唐話と呼ばれていた、一七、八世紀の中国語に至るまで、解説を施している。本稿は、これを同時代に編纂された他の手引書と比較することによって、その特徴

を明らかにすることを目的としている。

（一）　先行研究

江戸時代の唐話研究については、石崎又造『近世に於ける支那俗語文学史』（昭和一五年・弘文堂書店）をはじめとする多くの先行研究がある。また、石崎又造の研究成果を中心に、〈江戸時代の中国白話小説〉に関する諸研究の概略を記したものとして、斎藤護一「徳川時代の漢文学（其三）――支那俗語学・支那俗文学」（『近世日本の儒学』所収・一九八四・岩波書店）がある。これらの先行研究によれば、江戸時代には、「唐話××」と題する、今でいう中国語実用会話を目的とした入門書が数多く編纂された。そして、こうした唐話学習熱の高まりを受けて、語録における俗語表現等に関する研究も盛んに行なわれた。

しかし、従来の研究では、もっぱら唐話研究が日本の近世文学に及ぼした影響について述べられている。たとえば、中村幸彦「唐話の流行と白話文学書の輸入」（『中村幸彦著述集』第七巻「近世比較文学攷」所収・昭和五九年・中央公論社）などがそれである。そして、これらの先行研究においては、荻生徂徠（寛文六年―享保一三年、一六六六―一七二八）や、徂徠が開いた訳社という中国語研究会の講師であった岡島冠山（延宝二年―享保一三年、一六七四―一七二八）ばかりが取り上げられている。これに対して、語録の読解を目的とする、いわば、その読者層を儒者に限定する留守希斎の『語録訳義』は、これまで、あまり注目されてこなかった。

なお、『語録訳義』についての専論には、鳥居久靖「留守希斎「語録訳義」について――近世日本中国語学史稿の一――」（『天理大学大学報』Ⅲ―2・一九五二）がある（注1）。鳥居論考は、『語録訳義』の内容を具体的に紹介するとともに、特に『語録訳義』における引用書や、その引用回数について、かなり綿密な調査を行なっている。しかし、鳥居論考は、こうした数量的な分析には詳しいが、その一方、思想史的側面からの解説に乏しく、たとえば撰者である留守希斎の学問的背景や、『語録訳義』の当時における位置付けについてほとんど言及していない。そうではある

が、以下、『語録訳義』の基礎的研究として、随時、この鳥居論考に言及しながら論を進めてゆきたい。

『語録訳義』の撰者である留守希斎の事跡およびその撰述については、平重道「大阪の崎門学者留守友信の学問と人物」（『近世日本思想史研究』・昭和四四年・吉川弘文館）に詳しい。平論考を要約すると、次のとおりである。留守希斎、名は友信、通称は退蔵、希斎はその号で、また括嚢と号している。奥州一ノ関の出身で、初め、遊佐木斎（万治元年―享保一九年、一六五八―一七三四）に師事し、後にその養子となる。その後、京都に遊学し、ついに、養家を去って、三宅尚斎に師事する。壮年からは、闇斎学があまり普及しなかったと言われる大坂にて講席を開き、当地に没している。その間、宝暦一二年（一七六二）に、闇斎の墓所の改修事業が行なわれた際には、希斎は、全国の闇斎学者を動員して、その一切を指揮している。このことから、既に沈滞期に入っていたとは言え、希斎が当時の闇斎学派における代表的人物であったことが分かる。

そして、希斎と同門である山宮雪楼（享保年間の人）の『語録訳義』の序文からも、希斎がただ単に唐話に通じた人物ではなく、儒者としてすぐれた人物であったであろうことが窺われる。雪楼の序文に、『語録訳義』を高く評価した後、次のようにある。

然りと雖も公（希斎）の学 大にして、此れ（『語録訳義』の編纂） 特ただ其の緒餘なるのみ。世の斯の書を観る者、或いは公の学を以て此に止むと為すは公を知る者に非ず。

なお、関儀一郎『近世漢学者伝記著作大事典』（昭和五六年・琳琅閣書店）によれば（注2）、その撰述は、次のようなものがある。『論語諸説』、『古本大学和解』二巻、『小学註』二巻、『和漢文会録』二巻、『和学訳通』四巻、『性論発端私解』、『師友明鑑』二巻、『称呼辨正』二巻、『称呼辨正後篇』二巻、『称呼辨正対問』一巻、『俗語録』一巻、『俗語釈義』二巻、『語録字義』一巻、『語録釈義』二巻、『八陣幾要』十巻、『八陣細説』十巻、『八陣図説』、『雄鑑抄聞録』三巻、『祭祀来格説講義』、『敬斎箴筆記』、『復姓実録』、『天爵録』、『括嚢雑抄』四巻、『括嚢遺筆』二巻、『書置』一冊。ただし、『和漢文会録』は、希斎と朝鮮通信使との問答の記録であり、おそら

く、『和韓文会録』の誤りであろう。

（二）　『語録訳義』のテキスト

『語録訳義』は、未刊の書であるが、鈔本のかたちで広く流布して、現在に至るまで伝えられている。たとえば、長沢規矩也編『唐話辞書類集』第一七集（昭和四九年・汲古書院）に、「俗語訳義」の名で、収められている。この『唐話辞書類集』第一七集所収の『語録訳義』は、その序・凡例および外題には「語録訳義」とあるが、内題には「俗語訳義」とあり、『唐話辞書類集』はこの内題を採って書名としているのである。

また、『唐話辞書類集』第二集（昭和四七年）には、千手旭山（安政六年－昭和四年、一八五九－一九二九）の手によって増補された『語録訳義』も収められている（注3）。旭山によって増補された『語録訳義』について、長沢規矩也の「解説」（『唐話辞書類集』第二集所収）に、次のようにある。（以下、「解説」と記すのは、すべて『唐話辞書類集』の各本冒頭の長沢規矩也の解説を指す。）なお、「興成」とは、千手旭山の名である。

留守友信撰、千手興成補。留守友信の同書を増補した書の一種で、原本に比すれば、原項目に増補したり、新項目を設けたりして、語彙は殆ど旧に倍してゐる。

おそらく、『語録訳義』については、これら、『唐話辞書類集』に収められているテキストが、現在、もっとも利用しやすいものであろう。なお、この他、昭和三三年に、九州大学中国哲学史研究室から、楠本正継の家蔵本を底本として油印で出版された『増補語録訳義』がある。同書は、旭山によって増補された方の『語録訳義』を底本としている（注4）。

次に、「語録訳義」という書名について述べる。「解説」（『唐話辞書類集』第二集所収）は、流伝本の中に、「俗語訳義」、あるいは、「俗語釈義」という外題の『語録訳義』が存在することを指摘している。このことについて、鳥居論考は、現存する伝鈔本は、多く「俗語訳義（時に釈義）」と呼ばれるが、初名はおそらく「語録訳義」ではなかったかと述べる。その理由として、鳥居論考は次の二点を挙げる。一つは、撰

者である希斎の「凡例」に、『語録訳義』が「漢土の語録・野史・方言・俚語の類」の解説書であると明記している点、もう一つは、山宮雪楼の『語録訳義』の序文の中に、同書を「語録訳義」と称している点、この二点である。本稿は、以下、その初名を採って、「語録訳義」の名で統一する。なお、鳥居論考は、『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）が希斎の撰述として挙げる『俗語録』および『語録字義』について、その存否は未詳であるが、あるいは異名の同書ではないかと述べる（注5）。

さて、本稿は、テキストとして、『唐話辞書類集』第二集所収の旭山によって増補された『語録訳義』を用いる。なぜならば、同書は旭山の校訂を経ている分、文字の誤りが少ないからである。旭山の序文にも、次のようにある。

伝写の久しければ、魯魚衍脱　頗る多し。余　間ま嘗て之れを校正し、且つ其の遺漏を補い以て初学に授く。庶わくは、初学の　文に臨み其の義を索むるとき、則ち理義を求むるの一助たらんことを。

なお、旭山が新に採録した語彙は、すべて各画数ごとに、「補」として一まとめに、希斎の採録語彙の後に付け加え注解している。また、旭山は、原著『語録訳義』の採録語彙にも注解しており、それらの補注は、各語ごとに、希斎の注解の後に「興成　云えらく」、または、「興成　按ずるに」として付記している。あるいは、旭山の補注の中には、按語のないものがあり、それが希斎の注解の中に紛れ込んでいる可能性がある。だが、この旭山も、希斎と同じ闇斎学派の流れを汲む人物であり、したがって、同書をテキストとして用いることで、かりに、希斎の注解と旭山の注解とを混同することがあったとしても、闇斎学派の俗語研究のあり方を知る上での妨げにはならないであろう（注6）。

また、前出の「解説」にも、この旭山によって増補された『語録訳義』は、「とにかく、未刊の同類の書中では、流布が最も弘い」とある。岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」（『朱子語類大全』所収・一九七三・中文出版社）も、『朱子語類』の俗語解説書の一つとして、旭山によって増補された『語録訳義』を挙げ、それを評して「朱子語類の俗語解説の専書としては最も便利なものであろう」と述べる。したがって、

以下、本稿が『語録訳義』として引用するものは、すべて、旭山によって増補された、『唐話辞書類集』第二集所収の『語録訳義』からの引用である。

ただし、先の旭山の序文は、『唐話辞書類集』第二集所収の『語録訳義』には見られず、本稿は、油印本『増補語録訳義』に付されているものによった。因みに、『陽明学体系』付録「陽明学体系月報」（第七号－第一三号・昭和四七－昭和四九年・明徳出版社）に掲載されている「宋明俗語略解」は、この油印本『増補語録訳義』を底本としている。

（三）『語録訳義』の参考書目

山宮雪楼の『語録訳義』の序文に次のようにある。

『〔語録〕訳義』の書を為すや、凡そ語録の語の通暁し難き所の者、櫛比して縷分す。訓解　燦然として遺漏有る靡し。其れ後学に便なること大と謂うべし。世の聖経を読む者、宋朝の先賢の語録を読むに非ざれば、則ち其の平素教導の密を窺うこと能わず。而れども語録は之れ俗語多く、読者往々にして其の通じ難きに苦しむ。今や此の書有りて斯の患い無し。何ぞ其れ幸いならん！

要するに、この序文によれば、『語録訳義』は、語録を読解することを主たる目的とした手引書であり、特に、語録中の俗語表現について解説したものである。

『語録訳義』の希斎の「凡例」にも次のようにある。

漢土の語録・野史・方言・俚語の類、解し難きは、字義転換して字書の正註に異なればなり。故に当に句読上に就きて其の意義を暁るべし。今、撰編する所の者は、熟字の連用する者を抄出し、而して国字を用て其の下に贅（つけ）り、其の他、象胥（しょうしょ）（通訳官）の説を撮拾して以て此れに増補するものなり。

さて、『語録訳義』の特徴として、他書からの引用が非常に多い点が挙げられる。鳥居論考によると、同書の引用書は百種を越える。そして、これらの引用は、鳥居論考も指摘するように、〈注解のためのもの〉と〈出典として引かれるもの〉とに大別される。この〈注解のための引用書〉には、漢籍に限らず、江戸時代に編纂された、他の語録読解の手引書や唐話の入門書といった和書も多く含まれている。

しかも、それは単なる引用に止まらず、希斎は、場合によっては、先人の説を訂正している。また、自説を述べる際には、必ず「友信　按ずるに」と初めに明記している。なお、『語録訳義』は、漢文の箇所と漢字仮名交じり文の箇所とが併記されており、その表記は不統一ではあると言える。しかし、これは、諸解説を多く集めているという本書の性格上、止むを得ないことである。

では、『語録訳義』は、主にどのような書物を利用して編纂されたのであろうか。「凡例」に次のようにある。

引く所の諸もろの書題　長きを厭い、纔に一、二字を記すのみ。「解」字と書くは、『語録解義』なり。「要」字と書くは、『唐話纂要』なり。「便」字と書くは『字海便覧』なり。

これによって、『語録訳義』の最も多く利用した書物は、岡島冠山の『唐話纂要』（享保元年刊・一七一六）、同じく冠山の『字海便覧』（享保十年刊・一七二五）、そして『語録解義』であることが分かる。以下、『語録訳義』が基礎とした、この三書について述べる。なぜならば、『語録訳義』がよりどころとする三書の性格を明らかにすることによって、『語録訳義』の編集方針、ひいてはその独自性について知ることができると考えるからである（注7）。

また、『語録訳義』は、先学として、浅見絅斎・井沢灌園・岡島冠山・荻生徂徠・古賀精里・沢田希・沢田常省・三宅尚斎・梁田蛻巌・山崎闇斎の名を挙げて、その言説を引用している。

①　『唐話纂要』

『唐話纂要』は、享保元年（一七一六）刊・同三年（一七一八）増補本が、『唐話辞書類集』の第六集（昭和四七年）に収められている。その「解説」（『唐話辞書類集』第六集所収）に言う。

当時最も流行した唐話の教科書で、巻一から巻三の前半までは、二字至六字の語句に、江南音を旁注し、和訳を下に加へ、巻三後半には常言（通行の格言）を録し、巻四は会話の発音及び訳文、その本文の体裁は明治の急就篇の先駆ともいふべきものである。

つまり、『唐話纂要』は、熟語あるいは慣用句の字数順に、「二字話」「三字話」「四字話」という章立てになっているのである。これは、当時の辞書類の検索方法における、一つの典型であると考えられる。また、『唐話纂要』において注解される各語は、一見、何の規則性もなくただただ列挙されているような印象を受ける。したがって、『唐話纂要』は、およそ検索に便利であるとは言い難い。しかし、実は、このような〈章立て〉および〈各語の配列〉は、『唐話纂要』の編纂目的と密接な関係にある。

まず、学習者は二字から始め、二字から三字へ、三字から四字へと、短いフレーズから徐々に長いフレーズへと、傍注に基づいて発音練習を繰り返し、暗唱する。そして、最終的には、「常言」から「長短話」という完全な文を話すことができようになることを目指す。つまり、「二字話」「三字話」という分類は、検索に資するためのものではないのである。換言すれば、『唐話纂要』は、あくまでも順序立てて前から学んでゆく〈教科書〉であり、したがって、いわゆる〈辞書〉のように、検索の便を図る必要性はないのである。

しかも、各章に列挙された各語は、その前後の語と互いに全くの無関係ではなく、何等かの共通する概念を持っている。たとえば、『唐話纂要』「二字話」の冒頭に次のようにある。

太平・享福・快楽・快活・爽快・興趣・有趣・娯楽・興旺・興頭・興昌・吉兆・吉祥・吉瑞・吉凶・利市・発財・造化・高興・爽利・如志・如意・歓喜・中意・中用・安当・安穏・安泰・穏当・安楽・頑耍・耍子・游頑

以上のような〈よろこびごと〉に関する言葉が終わると、その後には次のような〈もてなし〉に関する言葉が続く。

喫飯・喫烟・請飯・用茶・喫酒・把盞・請酒・灑酒・盪酒・温酒・泡茶・煎茶・赴筵・豊筵

そして、この後には、さらに〈もてなしの言葉や動作〉に関する言葉が続く。

請客・招客・邀客・請坐・請上・上来・上坐・平坐・寛坐・端坐・請寛・跪坐・閑坐・坐下・咲話

……

このように、『唐話纂要』は、意味内容の近い、あ

るいは前の言葉から次の言葉が連想されるような言葉を一まとめに列挙している。これは、換言すれば、『唐話纂要』は、ある一定の状況で必要とされる語を想定し、それらを列挙したものであり、まさに唐話の実践に根ざし、かつ、教育的配慮に富んだ〈教科書〉なのである。中には、結果的に同じ頭字をもつ語が並ぶなど、たまたま、〈辞書〉のような配列になっている箇所もある。だが、構文といった意識は薄く、その主眼は、やはり、会話の〈場〉にあると言える。安藤彦太郎『中国語と近代日本』（一九八八・岩波新書）は、『唐話纂要』を「明治以前に出たもっともまとまった問答体の教科書」と称しているが、ここでいう「問答体」とは、各語が〈問いかけ〉と〈その答え〉とを繰り返す配列になっているという意味ではなく、各語が会話体で記されているという意味であろう。

では、次に、その注解方式について述べる。

(1)見出し語を挙げて、傍らに、その漢字の中国語の発音を片仮名で付す。（ただし、体系的な中国音の表記方法がない当時、『唐話纂要』は、その中国音に基づいて各語を分類し、発音の相違を示すまでには至っていない。）

(2)見出し語の下に、片仮名で和訳を記す。

(3)「長」「好」「中」「行」のように、意味の違いによって、中国語の発音の変わる字については、圏点を付す。

(4)長い熟語（あるいは慣用句）には、その傍らに訓点を付す。

このように、各語に中国音を振っていることから、『唐話纂要』が、まさに、唐話を〈話すこと（発音すること）〉を目的としていることが分る（注8）。そして、各語の傍らに訓点を振っていることから、唐話を〈訓読によって理解したい〉という需要があったことが分かる。たとえば、「方纔走去了」を「今ガタ。行レタ」と訳し、原文に訓点を振り、「方に纔に走り去り了る」と訓読している。他にも、「怎生他還不来」を「何トシテ。彼ハマダ来ラヌゾ」と訳し、「怎生ぞ他還て来ざるや」と訓読し、「差不多些好」を「大方ナラハヨヒ」と訳し、「差不多些にして好し」と訓読している。だが、このような訓読では、各句の本来の意味はまず取れないであろう。

これに比べて、その和訳は、訓読調の逐語訳的なものではなく、おおまかではあるが、わかりやすい和訳である。また、『唐話纂要』は、解説として、この非常に簡潔な和訳を付すのみで、句中の一字一字について分けて解説していない。なお、『唐話纂要』の和訳のみを記す注解方式は、けっして〈安易なもの〉と称するべきではない。これは、〈唐話の習得〉ということを目指した場合、このような注解方式を採らざるを得なかったからにすぎない。つまり、これは、学習者に各語あるいは各句を、一まとまりの〈熟語〉あるいは〈慣用句〉として理解させるためなのである。換言すれば、各語は、一言一句すべて実用に適した形、すなわち生きた言葉として取り上げられているのである。そのため、『唐話纂要』には、他書には見られる「一字話」の章がない。なぜなら、たとえば「了」や「得」などの一字の用法を知っていても、その一字だけでは、実際の会話の中で、何も伝えることができないからである。そこで、『唐話纂要』は、それよりも「完了（シマシタ）」「解得来（カテンカイタ）」という語を覚えることの方に意味があるとしているのである。このことから、『唐話纂要』は、唐話を習得するに当たって、決して文法的理解から入るものでないことが分かる（注9）。そして、これは、唐話を解説する際の、『唐話纂要』の一つの見識なのである。

②　『字海便覧』

『字海便覧』（一名、『経学字海便覧』）は、享保一〇年（一七二五）刊本が、『唐話辞書類集』第一四集（昭和四八年）に収められている。その「解説」（『唐話辞書類集』第一四集所収）に言う。

朱子語類中の四書五経部分の俗語を摘録解釈したもの。原題箋（底本第七冊のみ存）には「経学」の二字の角書がある。

まず、『字海便覧』の章立てについて述べると、それは、「理気」「鬼神」「性理」「学」「大学」「論語」「孟子」「中庸」……「本朝」「歴代」という、『朱子語類』の章立てにそのまま従っている。そして、適宜、問題となる俗語を摘出し、注解を施している。「解説」は、ただ『朱子語類』の「四書五経部分」のみに注解しているかのように述べるが、実際は、『字

海便覧』の注解は、『朱子語類』の全巻に及んでいる。もっとも、量的には、四書に関する部分が全体の六割以上を占めている。そして、この他、『朱子語類』の四書に至るまでの部分、五経に関する部分、五経から最終章までの部分が、それぞれ約一割強ずつを占めている。

要するに、『字海便覧』において注解されている各語は、章ごとに、『朱子語類』において使用される順に配列されている。そのため、『唐話纂要』同様、検索が非常に困難であり、各章ごとに最初から順を追って捜すしか方法はない。これは、まさに、『朱子語類』という特定の書物を前から順に読み進めることを、その編纂目的としているためである。換言すれば、『字海便覧』は、『朱子語類』を読解するための〈参考書〉あるいは〈注釈書〉であると言える。

次に、その注解方式について述べる。

(1)一字から五十字に及ぶ見出し字を掲げる。

(2)三字以上の見出し字には、訓点を施す。ただし、一字あるいは二字のものでも、解説に、「……ト読ム」などと、訓読の仕方を示すことがある。

(3)見出し語の下に、和訳を中心とする〈解説〉を施す。

この〈解説〉の具体的な内容について言えば、まず、全句の和訳を示す。次に、熟語ごと、あるいは一文字ずつ、小分けにして和訳や訓読の仕方を示す。その後、同義語・類義語・反義語や用例を挙げるなど、懇切丁寧に説明している。なお、ここで言う〈用例〉とは、〈典拠〉という意味ではなく、冠山が考案であろう〈例文〉のことを言う。また、「去声ニ読ムナリ」などと声調を示すものや、「差ハ音(イン)　叙(サイ)ニヨムベシ」などと音を示すものもある。中でも興味深いものは、和刻本『朱子語類』における、鵜飼石斎（元和元年―寛文四年、一六一五―一六六四）および安井真祐（元禄年間の人）の訓点を「古点」と称して、時に、「此ノ句　古点ニハ差ヒアリ」と述べて、その訓点を改めているところである。詳しいことについては、近々、別稿にて発表する予定である。いま、一例を挙げるならば、次のようにある。

只(ヒタスラ)認捲(チ)将(チ)去(レ)トハ。ヒタスラ。マクリタテ、ユケト。云フコトナリ。是(コレ)ハ戦ヒノ詞(コトバ)ナリ。只認ハ。

只管。只顧。只情ト同フシテ。ヒタスラト訓スルナリ。古点ニハ。差ヒアリテ。義理通ゼズ。

なお、この解説からも分かるように、必ずしも各語について、先に挙げたような解説がすべて施されているわけではない。因みに、「古点」に従えば、ここは、「只だ認捲し将ち去れ」という訓読になる。

以上のことから、『字海便覧』の解説が非常に逐語訳的であり、厳密な訓読法を提示していることが分かる。つまり、『字海便覧』は、〈『朱子語類』を読解するための参考書〉であると同時に、『朱子語類』を始めとする〈語録の類を訓読するための手引書〉でもあると言える。

しかし、ここで疑問が生じる。そもそも、冠山は、荻生徂徠とともに訳社を開き、〈訓読〉ではなく、中国音による〈直読〉を中心とする理解を推進した一派として知られる。ところが、先の『唐話纂要』においても、この『字海便覧』においても、明らかに、〈訓読〉ということに力点を置いている。このことを論じる前に、まず、冠山の経歴について、ごく簡単に述べる（注10）。

冠山は、かつて、長崎の一通事の職にあった。『唐話纂要』の林崇節なる人物の序文から、当時の通事に対するおおよその評価が窺われる。序文に次のように言う。

然り而うして通事の職　未だ以て貴しと為すに足らず。故に間ま英雄の士、其の職に補せらるを肯んぜざる者有り。亦た宜べならずや。茲に岡嶌玉成子なる者有り。華の音と語とに精通す。一たび口を開けば、則ち錚々然として金玉の声を成し、一たび筆を下せば、則ち綿々乎として錦繡の句を聯ぬ。乃ち是れを以て当世に鳴り、嚇々として人の耳目を驚かせ、郁々として芳を遠近に流す者なり。茲に年有り。然れども通事の職に補せずして、江湖に遊ぶは、無乃ろ其の職の貴とからざるを憎嫌せんか。嗚呼、英雄の志、必ず当に是くの若くなるべきのみ。

また、『先哲叢談後編』巻三には、冠山は、通事の職が賤職であることを理由に、その職を辞したとある。

冠山　始め訳士を以て萩侯に仕え、其の月俸を受けど、自ら賤職為ることを慙て、辞して家居す。

専ら性理之学を修め、独り此を以て西海に鳴る。

この『先哲叢談後編』の記載によれば、どうやら、冠山は少なからず宋学に通じていたようである。また、『先哲叢談後編』巻三や、『徂徠集』巻一八「訳社約」（『近世儒家文集集成』第三巻所収・昭和六〇年・ぺりかん社）には、冠山が、国子博士林鳳岡（正保元年－享保一七、一六四四－一七三二）の弟子員に加えられていたという記事もみられる。おそらく、冠山は、鳳岡のもとで、かなり本格的に宋学を学んだものと思われる。さらに、『唐話纂要』の垣内東皋（延宝八年－享保一七年、一六八〇－一七三二）による跋文にも次のようにある。

玉成岡嶌君は、世々長崎に家す。少きより華客に交わりて其の語に習熟す。凡そ四書・六経より以て諸子百家・稗官小説の類に及ぶまで、其の声音の正と、詞言の繁と、頗る其の閫奥を究む。

なるほど、冠山は『日本諸家人物誌』に「儒者」として記され、『儒林姓名録』や『漢学名家録』にも、その名が収められていることから、冠山の当時における位置付けは、たしかに「儒者」である。しかし、その講義内容からみて、いわゆる儒者とは異なっていたようである。『先哲叢談後編』巻三に言う。

冠山　経史を講説し、生徒に誨督すること、其の為す所　世儒に大に異なり。世の儒者　必ず仁義道徳治乱興廃を以てす。辨論鄭重、間ま煩冗に渉る。欠伸を生ぜざる者　少なし。冠山　専ら時世目撃の事実を言う。

このように現代に大きな関心をもつ冠山の興味は、当然、当時の現代語の語学的な方面、すなわち唐話そのものに向かっていたと言える。したがって、冠山の撰述を見ても、その大半は、唐話に関するものと文学に関するものとである。まさに、近世日本俗文学の大家と言われる所以である（注11）。

ところが、これに比べて、経書に関する撰述としては、『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）によれば、わずかに『字海便覧』と『四書唐音辨』とが挙げらるのみである（注12）。しかし、『四書唐音辨』は、石崎又造「江戸に於ける支那語学の流行」（前出『近世に於ける支那俗文学史』所収）や、青木正児「岡島冠山と支那白話文学」（『青木正児全集』第二集「支那文

藝論藪」所収・昭和四五年・春秋社）によれば、朝岡春睡なる人物の撰述であり、冠山はその序文を記しているだけである。また、『近世漢学者伝記著述大事典』（前出）にはみられないが、石崎論考には、冠山の撰述として、『唐音学庸』が、実物の写真を挙げて紹介されている。氏によれば、「内容は大学と中庸に夫々唐音を附したもの」であり、同書には、どうやら唐音が付されているのみで、その内容に関する注釈は記されていないようである。つまり、冠山には、自己の語学力を通じて、朱子学の本質にかかわるような問題を論じる撰述がないのである。換言すれば、この『字海便覧』こそが、冠山にとっての、ほとんど唯一の経学研究の成果であると言える。

この点について、柳沢淇園（元禄一六年―宝暦八年、一七〇三―一七五八）の『独寝』（筆者未見）に、次のようにある。

岡嶋援之は長崎にては、長左衛門と言ひしものなり、華音には奇なる生まれなり。服部元喬がいふには、和中の華客なり、といひしも尤なり、学才は余りなしとかや。

「元喬」とは、荻生徂徠の弟子の服部南郭（天和三年―宝暦九年、一六八三―一七五九）の名である。南郭によれば、冠山は「学才は余りない」ようである。しかし、「和中の華客」と称されていることから、冠山の語学力が群を抜いていることが分かる。そして、それは誰もが認めるところであった。たとえば、『唐話纂要』の高瀬学山（寛文八年―寛延二年、一六六八―一七四九）による序文に次のようにある。

独り我が友、玉成子、能く萃を抜く者か。玉成は崎陽の人なり。少くして大志を発し、長じて東都に来る。其れ口を開きて唐を譚じ、筆を揮て和を訳すや、恰も仙人の尸解するが如し。凡骨庸胎を将て一時に脱換して、独り其の衣冠のみを餘して化せざるがごとし。一起一坐、一咲（笑うこと）一咳、唐に肖ずということ無し。嘗て崎陽に在りて諸唐人と相い聚りて譚論す。其の調戯謾罵、彼と絲髪も差わず。傍観の者、惟だ衣服を辨じて其の玉成なることを知る。其の技の妙、大率ね此くの如し。

また、『唐話纂要』の原武郷子なる人物の跋文にも、

次のようにある。

予が友　玉成子は、長崎の人なり。幼きより唐音を学び、沈潜反覆すること今まで三十年。其の語、其の音（カ）、四声を宣ぶること精暢たり。人の能く其の右に出づる者無し。長崎と唐国とを差ぶるに、壌地　相い接す。往来　甚だ多し。玉成　其の間に生長し、日々唐人と臂を交えて談喚す。特り其の口の唐なるのみならず、遂に一身をして変ぜ使めて唐為り。其の行くや、唐なり。其の止まるや、唐なり。其の立つや、唐なり。其の坐るや、唐なり。為して唐ならざる無し。

以上のことからみて、冠山が、特に『字海便覧』において、訓読に拘るのは、その卓越した語学力に加えて、日本の儒者の伝統である〈訓読〉の能力を有していることを、いわゆる儒者たちに示すためであったとは考えられる。

なお、『字海便覧』については、『東京支那学会報』大会臨時号（昭和二九年）に、中山久四郎「経学字海便覧について」という講演の短い記録がある。この記録に、「此一書の外「語録箋解」「忠義水滸伝解」なども参考するに足ります」とある。ここで言う「語録箋解」に関しては、『織田文庫図書目録』（昭和一六年・無窮会）に「語録箋解、附素読一助、貞享三」とあるが、その詳しい内容については、同書を実見していないため未詳である。また、『語録訳義』中、「箋解云」とあるのは、氏の言うところの『語録箋解』であろうか。

なお、実見していないが、油印本『語録訳義』と同様に、楠本正継の家蔵本を底本とした、『字海便覧』が九州大学中国哲学研究室から昭和三一年に油印で出版されている。

③　『語録解義』

ここまで、岡島冠山の『唐話纂要』および『字海便覧』について述べてきた。本節では、留守希斎の『語録訳義』が基礎とする、第三の書、すなわち『語録解義』について述べる。

『語録解義』は、その書名から分るように、これも語録を読解するための手引書である。その注解は、すべて非常に短い漢文で記されており、『唐話纂要』や

『字海便覧』のような和訳は付されていない。内容的には、注解があまりにも短いため、特にこれと言った特色は見い出せない。

鳥居論考によれば、『語録訳義』中、『字海便覧』からの引用回数は、計九十九回であり、『唐話纂要』からの引用回数は、計五十五回である（注13）。これに対して、『語録解義』からの引用回数は、計十六回と、前出の二書に比べてかなり少ない。

しかし、既に述べたように、『語録訳義』の「凡例」にその書名を挙げている以上、撰者である希斎が、この書をかなり重視していたと考えられる。

現在、内閣文庫に、「語録解義」と題する鈔本が二本、蔵有されている。『内閣文庫国書分類目録』を見ると次のようにある。なお、引用中の（　）および〔　〕は、原文のママである。

語録解義　（延宝六年跋刊本）
林信勝（羅山）　写
〔語録解義〕　語録辞義合写
〔林信勝〕（語）山崎嘉　写

同目録は、前者の『語録解義』の撰者として、ただ「林信勝（羅山）」とのみ記している。ところが、後者については、撰者として、「山崎嘉」（嘉は、闇斎の名）と記すものの、そのすぐ上に〔　〕付で、羅山の名を併記している。これは、何を意味しているのであろうか。以下、この『語録解義』の撰者について、先行研究を踏みつつ検討してゆきたい。

なお、『語録解義』については、近藤啓吾「『語録辞義』の発見」（『山崎闇斎の研究』・昭和六一年・神道史学会）に詳しく、本稿が行なった『語録解義』に関する今回の調査は、近藤論考と一部、重複している。しかし、あえてその内容を繰り返すのは、再確認と若干の補いを加えるためである。

さて、内閣文庫が蔵有する両書を実見したところ、次のようなことが分かった。まず、羅山が編纂したとされる『語録解義』（以下、羅山本と略記する）と、闇斎が編纂したとされる『語録解義』（以下、闇斎本と略記する）とは、採録語の配列や、解説の文字がわずかに異なる以外、その記述は、ほぼ一致しているのである。要するに、内閣文庫が蔵有する二本の『語録解義』は、同一の内容、すなわち、同一の書なのである。

そして、さらに、この〈内閣文庫所蔵の『語録解義』〉を、〈『語録訳義』に引かれる『語録解義』〉と比較したところ、両者の記述は、これもまた、ほぼ完全に一致した。つまり、〈内閣文庫所蔵の『語録解義』〉は、まず間違いなく〈『語録訳義』に引かれる『語録解義』〉であると言える。

ただし、羅山本と闇斎本との巻末には、それぞれ付録が付されており、羅山本には『常話方語』と「与汪徳夏筆語・与朝鮮進士文弘績筆語」とが付され、闇斎本には『常話方語』と『語録辞義』とが付されている。つまり、両者はいずれも三部構成になっているのである。このうち、両者に共通する『常話方語』は、『語録解義』同様、両者の間に大きな違いは認められず、同一のものである。すると、両者の違いは、それぞれの巻末の付録、すなわち、「与汪徳夏筆語・与朝鮮進士文弘績筆語」と『語録辞義』とにあることになる。

これらの付録について、もう少し詳しく述べると、まず、『常話方語』は、これも宋明の語録中に見られる俗語を解説したものである。その注解方式は、初めに見出し字を挙げ、その下に和訳を記している。『語録解義』が、すべて漢文で解説を施しているのに対して、『常話方語』は、「理会　合点スルヲ云」などと、漢字仮名交じり文で記されている。

その撰者については、『語録解義』所収の『常話方語』には、特に、何も記されていない。しかし、同書は、現在、『唐話辞書類集』第五集（昭和四六年）に収められており、そこには、「右、『常話方語』、浅見先生ノ雑記ヲ以写ス」という識語がある。「浅見先生」とは、闇斎の弟子である浅見絅斎（承応元年－正徳元年、一六五二－一七一一）である。この識語から、同書が、絅斎の俗語に関する記事を、その弟子が集めたものであるということが分かる。（注14）。

次に、「与汪徳夏筆語」と「与朝鮮進士文弘績筆語」とについて述べる。「与汪徳夏筆語」は、羅山と汪徳夏なる人物との唐話に関する問答の記録である（注15）。「与朝鮮進士文弘績筆語」は、文字どおり、朝鮮の進士である文弘績（号は、白眉）との問答の記録である。その注解例を挙げると、たとえば、『語録解義』所収の「与汪徳夏筆語」に、次のようにある。

一、林氏曰く、騙の字義は奈何。汪曰く、騙は害

の義、人の　銀を借りて公心（法律や約束を守る良識）を以てこれを還すをせざるが如きは、則ち騙なり。又た俗語に曰く騙は誑なり。

これらは、それぞれ、『羅山先生文集』（大正七年・平安考古学会）巻五九「雑著四」および巻六〇「雑著五」に収められている。『語録解義』所収のものは、『羅山先生文集』所収のものより条目の数が少なく、配列や字句もやや異なるが、少なくとも「与汪徳夏筆語」および「与朝鮮進士文弘績筆語」が、羅山の俗語に関する言説であることは間違いないであろう。

なお、羅山本の巻末には、「此の書　羅山先生の編述なり。与　秘めて出ださざること尚し。今　梓鏤し。て以て万世に伝えんとするものなり」とあり、また、続けて、「于時延宝六戊午（一七六八）暦正月上澣吉日　下総国本庄住人依田氏　山本九左衛門板行。」とある。この識語によれば、羅山本は、かつて刊行されていたようである（注16）。

最後に、『語録辞義』について述べる。これも『語録解義』や『常話方語』と同様、語録読解のための手引書である。まず、その前半の体裁は、『語録解義』とよく似ており、一部、漢字仮名交じり文で記されているが、大部分は漢文で「討　尋也」「了然　明々の貌なり」「伎倆　才也、智術也、猶技能と言うがごとし」などと記されている。また、一部、異体字について解説を施して、「圣　聖に同じ」「太　然に同じ」などと記している。このような異体字に関する解説は、『唐話纂要』および『字海便覧』にはない。これが後半になると、今度は、『困学紀聞』を初めとする数種類の書物から俗語に関する記載を、計二十九条、引用している。

この『語録辞義』の撰者については、その巻末に、はっきりと「右、山崎氏　之れを撰す」とある。そして、近藤論考も指摘するように、特に、『語録辞義』の後半部分に引用される記載は、すべて闇斎の『文会筆録』に引用されているものばかりである。このことから、『語録辞義』が、たしかに闇斎の手によるものであることが分かる。なお、近藤論考は、『語録辞義』を、『文会筆録』に先駆けて著された、闇斎の俗語に関する「未完の幻の書」と見なしている。

以上、羅山本および闇斎本の巻末の付録について述

べてきた。まとめると、羅山本には、絅斎の『常話方語』と羅山の「与汪徳夏筆語・与朝鮮進士文弘績筆語」とが付され、闇斎本には、絅斎の『常話方語』と闇斎の『語録辞義』とが付されている。すると、本節の冒頭に挙げた『内閣文庫国書分類目録』が、闇斎本について、撰者として闇斎の名を挙げると同時に羅山の名を挙げ、かつ、「語録辞義合写」と付記しているのは、同目録が、闇斎本を〈羅山の『語録解義』に、闇斎の『語録辞義』を付したもの〉とみなしているからであろう。また、同目録が闇斎本の書名に〔　〕を付しているのも、便宜上、その巻頭にある『語録解義』をもってその総名としているものの、やはり同書を「語録解義」と題することへの疑問を残しているためであろう。

補訂版『国書総目録』なども、おそらく、これを受けて、羅山の撰述として『語録解義』を挙げ、「内閣（一冊）（語録辞義と合）」と記し、『語録辞義』については、闇斎の撰述とし、「内閣（語録解義と合一冊）」と記している。つまり、同目録も、闇斎本を〈羅山の『語録解義』に闇斎の『語録辞義』を付したもの〉としているのである。

では、闇斎と『語録解義』とは、はたして、全くの無関係なのであろうか。たとえば、石崎又造『近世における支那俗語文学史』（前出）巻末の「附録二、近世俗語俗文学書目年表」は、「成立年代未詳（刊本）」のものとして、「語録解義、一冊、写、林羅山、延宝八年（一七七〇）及貞享四年（一六八七）識語アリ」を挙げる一方（注17）、「存否未詳」のものとして、「語録解義、一冊、写、山崎闇斎、朱子語類中ノ俗語ヲ解シタモノ（国書解題所見）」を挙げている。これによれば、闇斎にも、「語録解義」と題する撰述があることになる。

そこで、この「附録」が引く佐村八郎の増訂『国書解題』（昭和五一年・臨川書店）を見ると、同書は、やはり、羅山撰の『語録解義』と闇斎撰の『語録解義』との二種類を挙げ、羅山の『語録解義』については、「朱子の語録中の難解な字を摘出して略解したるもの」と解説し、闇斎の『語録解義』については、「朱子の語録中より、俗語及び俗字にして解しがたきものを抄出して、一々義解を施したるものなり」と解説している。

また、補訂版『国書総目録』も、闇斎の撰述として、『語録辞義』のほかに、『語録解義』を挙げている。ただし、これについては、「『続史籍集覧』「番外雑書解題」による」と付記している。そこで、この近藤瓶城『続史籍集覧』第一〇冊（昭和五年・近藤出版部）所収の戸田氏徳「番外雑書解題」第一七巻を見ると、「語録解義一巻、一冊、写、山崎闇斎、朱子の語録中より俗字及び俗語の尤も解しかたきものを記出して逐一その義を解したる書なり」とある。この記述は、先の『国書解題』と非常によく似ており、『国書解題』は、おそらく、この『続史籍集覧』によったものと思われる。

以上のことから、次の二つの可能性が考えられる。一つは、羅山の『語録解義』とは別に、闇斎にも「語録解義」と題する撰述があったという可能性である。もう一つは、諸解題が挙げる闇斎の『語録解義』とは、本稿のいわゆる闇斎本を指すという可能性である。換言すれば、巻末に闇斎の『語録辞義』を付す『語録解義』を見て、本来、羅山の撰述であるものを闇斎の撰述としたのではなかろうかというものである。

この一つめの可能性を否定することは難しい。だが、少なくとも、『山崎闇斎全集』（昭和一二年・日本古典学会）および『続山崎闇斎全集』（昭和一二年・日本古典学会）には、「語録解義」と題する闇斎の撰述は採られていない。また、『続山崎闇斎全集』下巻の巻末にある「闇斎先生著書解説」にも、「著書」としてのみならず、「編次書」「存疑・仮托書」としても記載されていない（注18）。

かりに、二つめの可能性を採るならば、この混乱の原因は、闇斎本および羅山本の巻末の付録、あるいは巻末の識語にあると考えられる。つまり、諸解題は、これに基づいて、それぞれの巻頭の『語録解義』の内容が同じであるにもかかわらず、一方の『語録解義』を「林羅山撰」、もう一方の『語録解義』を「山崎闇斎撰」としたのではなかろうか。

だが、そもそも、羅山本および闇斎本の巻頭にある『語録解義』は、『内閣文庫国書分類目録』が言うように、本当に羅山の撰述なのであろうか。羅山は、闇斎同様、あるいは、それ以上に、その撰述とされるものの中には、いわゆる仮託書の類が多い。したがって、

何をもって羅山の撰述とするかの判断は非常に難しく、しかも、その根拠となるような、『語録解義』に関する序跋の類が『羅山先生文集』（前出）に採られておらず、『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）にも、羅山について、「語録解義」と題する撰述は挙げられていない。すると、三つめの可能性として、『語録解義』は、実は、闇斎の撰述であり、羅山本こそ、〈闇斎の『語録解義』に羅山の俗語に関する問答を付したもの〉という可能性が出てくる。

ただ、あるいは、それぞれを、闇斎、または、羅山の付録を含めて、一冊の『語録解義』という書物と見れば、両書を〈内容の（一部）異なる二つの書物〉とみなすこともでき、あながちこれを混乱と言うことはできない。

ところが、このような状況のもとで、鳥居論考は、本稿が示す二つめの可能性については、一切、考慮しておらず、あくまで、羅山および闇斎のそれぞれに、「語録解義」と題する撰述が存在するとしている。しかも、特にその根拠を述べずに、『語録訳義』が引くところの『語録解義』の撰者は、羅山であるとしている。なお、鳥居論考の両書に関する記述は、石崎又造の「附録」の記述と全く同じであり、おそらく、鳥居論考は、この「附録」に、ただそのままよっているのであろう。したがって、氏は、当然、内閣文庫の羅山本および闇斎本を実見していないものと思われる。

これに対して、近藤論考は、たしかに、羅山本および闇斎本を実見している。しかし、本稿が示す一つめの可能性については言及せず、二つめの可能性のみを採っている。そして、『語録解義』の撰者を羅山と断定し、その根拠として、羅山本の冒頭、すなわち、内題の下に「林氏編」とあること挙げている。その上、近藤論考は、闇斎本の巻末にある「右、山崎氏　之れを撰す」という識語は、『語録解義』の巻末部分、すなわち、『語録辞義』にのみかかるとしている。だが、闇斎本の冒頭には、「林氏編」という識語はなく、また、鈔本という同書の性格上、羅山本の冒頭のこの識語がどこまで信用できるものなのか疑問である。

ここで、本稿は、この『語録解義』は、むしろ、闇斎学派と関わりの深い撰述であると考える。なぜなら、留守希斎の『語録訳義』以外に、闇斎もまた、『文会

筆録』の中に『語録解義』を引用しており、あるいは、同書は、闇斎学派において、比較的重要視されていた書物と考えられるからである。なお、『語録訳義』が引く『語録解義』の記述と、『文会筆録』が引く『語録解義』の記述とは一致するので、両者は、たしかに同一の書である。

また、闇斎の弟子である三宅尚斎の『黙識録』巻六「経伝」にも、『語録解義』に関する記載が見られる。

『語録解義』尚二巻は、漢土の人の作る所にして、『〔文会〕筆録』も亦た之れを引く。『〔朱子〕語類』謂う所の『小学字訓』は、恐らくは『性理字訓』を指すなり。『語録解義』、『性理字訓』、並びに今之れを刊行す。

ここまで、『語録解義』の撰者を闇斎とするか、羅山とするかについて論じてきたが、実は、この尚斎の記載によれば、『語録解義』は、「漢土の人の作る所」であって、日本人の手によるものではないのである。また、その内容からみて、尚斎の言う『語録解義』と、闇斎の利用した『語録解義』（すなわち希斎が引用する『語録解義』）とは、同一の書であり、このことは、尚斎が、闇斎の直接の弟子であることを考え併せれば、まず間違いないであろう。

では、内閣文庫が蔵有する『語録解義』が、日本人の手によるものでないならば、羅山および闇斎は、この『語録解義』と、一体、どのような形で関わったと言うのであろうか。一つ考えられるのは、これまで言われてきた〈林羅山撰〉あるいは〈山崎闇斎撰〉というのは、純粋な意味での〈著述〉を意味するのではなく、羅山あるいは闇斎によって再編集された〈編著〉、あるいは、その手によって校訂された〈復刻本〉という意味で用いられているのではなかろうか、ということである（注19）。そうすれば、あるいは、両者に、それぞれ、同名同一の書物があってもおかしくはない。

既に述べたように、本稿は、『語録解義』が、闇斎学派の人々の撰述の中に、しばしば登場していることから、闇斎学派の人間が何らかの形で『語録解義』の編集に関わったのではないかと考える。ところが、近藤論考は、本稿とは逆に、『語録解義』が『文会筆録』に引用されていることを根拠に、次のように述べる。

〔闇斎が『文会筆録』の中で、〕しばしば俗語の

注解に『語録解義』を引いてをり、しかもその文脈から見てこれは闇斎が自著を引いたものとは考えにくいから、これは『語録解義』という別人の著書があって、闇斎はそれより引用したものといふべきであらう。

つまり、近藤論考は、かりに『語録解義』が、闇斎の自著であるならば、それを別の自著、すなわち『文会筆録』の中で、「『語録解義』に曰く」として引用するのはおかしいと言うのである。しかし、既に述べたように、『語録解義』が、闇斎の〈編著〉あるいは〈復刻本〉であるならば、たとえそれを自著の中に引いても、一向に不自然ではない。

一方、阿部吉雄「闇斎の朱子学文献研究と李退溪」（『日本朱子学と朝鮮』所収・一九六五年・東京大学出版会）は、次のように述べる。なお、「退溪」とは、朝鮮、李朝の代表的朱子学者、李滉（一五〇一―一五七〇）の号である。

闇斎の「文会筆録」を見ると、「語録解義」や「退溪集」を引用して、俗語の解釈をなしているところが数条見える。筆者は久しくこの「語録解義」なる書の著者を知ることができないでいるのであるが、おそらく、李退溪とその門人柳希春（眉巌）の原著「語録解」と何等かの関連のある書ではないかと思っている。その理由の一つは、「文会筆録」の引用文と「語録解」とを比較してみると、共に一字類、二字類、三字類というように分類している点が一致し、また文章が多く一致している所があるからである。ただし「語録解」は、或る所は漢文で書き、或る所は諺文で書いてあるが、「語録解義」の方は、「文会筆録」に引用されているものは全文漢文で書かれている。従って諺文の部分を漢訳して比較検討しなければ、もちろん正確なことはいえないが、書名の点より考え、また中国ではこの種の著作の不必要な点などより考えて、この「語録解義」は「語録解」に関係ある著作であり、少くとも朝鮮系統の本ではなかったかと考えるのである。三宅尚斎の「黙識録」に、「語録解義、小本一巻、漢土人所作」と見えるが、中国でこのような書は、作られなかったと思う。阿部論考は、『語録解義』を朝鮮系統の本ではない

かと述べ、中国系統か朝鮮系統かという問題は残るものの、本稿と同じ、『語録解義』を日本人の手によるものでないとする立場であると言えよう。

また、阿部論考は、闇斎の『文会筆録』が、『語録解』の他にも、李退渓の文集や『朱子語類』の中の俗語を解釈して、朱子の文集や『朱子書節要』を引用している実例を挙げ、闇斎学派が盛んに朝鮮系統の書物を参考にしていることを指摘している。

ところで、この一字類・二字類・三字類という分類についてであるが、『文会筆録』に引かれている『語録解義』は、たしかに「『語録解義』一字類」「『語録解義』三字類」と記しているが、内閣文庫所蔵の『語録解義』を見ると、一字類・二字類・三字類といった分類になっておらず、一字と二字と、二字と三字・四字とが入り混じっている。近藤論考はこの点を挙げて、阿部論考に反論し、『文会筆録』の分類は、「闇斎がこれを自著に引用するに当つて、便宜上、二字類・三字類といふ表現を行ったと思はれる」と述べ、『語録解義』を朝鮮系統の本とする阿部論考を否定している。

そこで、阿部論考が挙げる『語録解』を実見したところ、それは『語録解義』と書名が似ているのみならず、次のいくつかの共通点が見られた（注20）。たとえば、その採録語は、内閣文庫所蔵『語録解義』が採録する二三〇語（内、二語が重複しているため、実質は二二八語）中、二〇六語が『語録解』の採録語と同じである。また、『語録解』は、一部、ハングルで表記されているが、その漢文で記された部分の解説だけを見ると、両者の記述は、非常によく似ており、両者が全くの無関係であるとは思われない。そこで、実際に『語録解義』の解説と『語録解』の解説とを比較したものが、本稿付録の一覧表である。ただ、そのハングルの内容については、それが近代以前の語を多く含み、現代韓国人にとっても読解に困難な所が多いため、現在、私は韓国人研究者と共同で研究中である。

要するに、近藤論考は、『語録解』の形式（分類方法）については言及しているが、その『語録解義』の内容（記述）の類似性に触れていない。これは、おそらく、近藤論考がこの『語録解』を実見していないためと思われる。

以上をまとめると、まず、『語録解義』の〈原著者〉

については、おそらく、日本人の手によるものでないということ以外は、依然、未詳である。次に、現存する『語録解義』の〈編者〉についても、羅山とみなす説が、多数を占めているようであるが、『語録解義』の編集に、闇斎学派の人間が何らかの形で関わったのではないかという可能性も捨てきることはできない。

その理由として、一つには、『文会筆録』を筆頭に、『黙識録』『語録訳義』など、闇斎学派の書物中に、しばしば、この『語録解義』が引かれ、闇斎学派において同書が重視されているという事実があるからである。もう一つには、『語録解義』と李退渓の『語録解』との類似性から、やはり朝鮮朱子学派と関係の深い闇斎学派の人間が、その撰者として浮上してくるからである。また、一つには、羅山本と闇斎本とのいずれにも、『語録解義』の付録として絅斎の『常話方語』が付されていることに対して、納得のゆく説明がなされていないからである。特に、かりに、『語録解義』を羅山の撰述とするなら、羅山本において、なぜ、羅山の撰述と撰述との間に、闇斎の弟子である絅斎の『常話方語』が付されているのであろうか。これは、やはり、巻頭の『語録解義』と『常話方語』とが何らかの連関性をもつと考えるべきではなかろうか。つまり、闇斎が編纂した『語録解義』に、その弟子である絅斎の『常話方語』を付したと考えらるべきではなかろうか。また、闇斎本において、『語録解義』、『常話方語』、『語録辞義』の三書は、いずれも語録を〈読む〉ということを目的としているが、これに対して、羅山本の巻末の問答は、少し異質である。しかし、いずれも推測の域を出ず、『語録解義』の撰者を、限定する理由としては不十分である。したがって、ここでは、その可能性を示すに止める。

なお、『語録解義』および『語録解』が、いずれも稀覯本であるが故に、上記のような種々の見解が生じていた。しかし、本稿の注に、その所在を明記しておいたので、今後は、ぜひとも原本を参照されたい。

（四）『語録訳義』

さて、本題に返って、留守希斎の『語録訳義』について述べる。同書の最大の特徴は、採録語彙が、すべ

て各語の頭字の画数順に配列されている点である。この分類法は、韻書のような〈音〉をもとに分類する系統とは異なり、漢字の〈形〉に主眼を置いた分類法であると言える（注21）。しかし、結果的には、既に述べたような完成度の高い冠山の撰述をばらばらにしていることにもなる。たとえば、『語録訳義』「五画」の冒頭に次のようにある。

白田水田・白々地・回該・另外・生授・叮嚀・主意・外首・白地・仔細検点・布箅・主子・末稍・甘心・主張・他們・半二不三・半上半下・半上落下・収拾・本色……

ここに引用するように、各語は、相互に何の関連性ももたず、機械的に列挙されている。ただ、同じ頭字をもつ語をできるだけ前後に配列しようとしてはいる。したがって、『語録訳義』の分類法は、〈類書〉に代表されるような概念別、すなわち〈義〉に主眼を置いて分類する系統とも異なるのである。換言すれば、『語録訳義』は、言語を〈物〉としてとらえており、『唐話纂要』のように、実際の会話における〈場〉については考慮されていない。ここに徂徠学派と闇斎学派との俗語研究に対する意識の相違が窺われる。

つまり、『語録訳義』は、先の『唐話纂要』のような唐話の〈教科書〉でもなければ、『字海便覧』のような特定の書物に個別的に対応する〈参考書〉でもない。その形態は、一般性をもった〈辞書〉に最も近いと言える。

次に、『語録訳義』の注解方式は、『唐話纂要』『字海便覧』『語録解義』同様、見出し字を挙げ、その下に和訳を中心とする解説を施すものである。しかし、見出し語は、『字海便覧』のように、一つの完全な文や句を挙げるような長いものは少ない。また、解説は、『唐話纂要』のような、端的なものから、長いものでは、一葉から二葉に及ぶものもある。鳥居論考は、この『語録訳義』の注解方式を次の六種類に分類している（注22）。

(a)単に和訳のみを示すもの
(b)和訳を附せず出典のみを挙げるもの
(c)和訳を附し出典を挙げるもの
(d)和訳を施し、該語に対する他書の注解または先人の言説を引用してその意義を更に明らかにす

るもの

(e)他書の解釈を引き按語を加えてこれを正しあるいは批判するもの

(f)見出し語の類語を挙げて同時に説明するもの

以上の注解方式を先の『語録訳義』が基礎とする『唐話纂要』および『字海便覧』の注解方式と比較してみる。なお、『語録解義』は、未詳の部分が多いので、今回は除く。

まず、最も多く採られている方式である(a)は、まさに『唐話纂要』にしばしば見られた端的な注解方式である。これは、逆に、その大部分が『唐話纂要』によっているとも言える。次に、(f)の注解方式は、『字海便覧』に多く見られる方式である。すると、『語録訳義』と他書との違いとして残るものは、(b)(c)の〈出典を挙げる方式〉と(d)(e)の〈他書の注解を引用する方式〉との二点である。

まず、この前者、すなわち〈出典を挙げる方式〉について述べる。その前に、注意したい点は、鳥居論考は『語録訳義』が出典として挙げる書物の中に、『朱子語類』を挙げている点である。鳥居論考は、「出典では朱子語類（五十八）が圧倒的に多く引かれている（中略）、その他程朱に関したものでは、二程外書（二）、朱子全集（一）、朱子文集（五）、朱子書節要（一）、朱子行状（二）、謝上蔡語録（一）などの名が見える（数字は該書の引用回数）」と述べるが、正確にはこれは、〈用例〉というべきであって、〈出典〉ではない。なお、その『朱子語類』からの〈用例〉の大半は、『字海便覧』によっている。

さて、鳥居論考が指摘する〈出典を挙げる方式〉は、計百箇所近くある。これを称して、鳥居論考は、「本書注釈における著者の博引傍証ぶり（多少蕪雑なきらいはあるにしても）は、とかく訓詁を喜ぶ漢学者たちに対して何程かの魅力と興味を与えたであろう」と述べる。そして、このような『語録訳義』の編集方針は、旭山によって受け継がれ、この傾向はますます強くなり、これに加えて、原著には採られていない、俗語以外の官名や地名などの語も採録している。

しかし、その一方で、鳥居論考は、「いわゆる孫引もかなり多いことが推測される。このさい希斎が何によったか、いわば出典の出典とも申すべき書物が何で

あるかは未だ精査していない」と述べ、「出典の出典」が存在する可能性を指摘している。

これに関して、本稿が調査したところ、『語録訳義』において、出典を明記する語の大部分は、『困学紀聞』巻一九「評文」において既にその出典が指摘されていることが分かった。『困学紀聞』は、「俗語は皆　本とする所有り」と述べた後、百語以上の俗語の出典を明らかにしており、『語録訳義』は、そこで挙げられている各語を画数別に振り分けているにすぎない。

ここで、鳥居論考より、『語録訳義』が〈出典として〉引く主な書名およびその引用回数を抜粋する。そして、『困学紀聞』にも同じ指摘がある場合、鳥居論考より抜粋した引用回数の下に、〔　〕付で、その回数を記す。ただし、先に挙げた〈用例として引く朱子学関係の諸書〉は省いている。

『淮南子』四〔1〕　『易』四〔1〕
『漢書』十六〔10〕　『後漢書』十七〔13〕
『国語』六〔6〕　『左伝』八〔2〕
『三国志』九〔9〕　『史記』七〔4〕
『詩経』六〔4〕　『周礼』四〔3〕
『荀子』三〔3〕　『書経』三〔1〕
『晋書』六〔5〕　『水滸伝』四〔0〕
『荘子』四〔3〕　『文選』四〔2〕
『礼記』六〔4〕　『列子』五〔2〕

この一覧表から、『語録訳義』の出典を示す注解の大部分が、『困学紀聞』と重なっていることが分かる。また、『困学紀聞』に「……に出づ」とあるものは、『語録訳義』もそのまま「……に出づ」と記し、『困学紀聞』が一部、原文を挙げているものは、『語録訳義』も同じよう原文を挙げている。このことから、『語録訳義』が出典を明記する際は、ほぼ『困学紀聞』巻一九における記載によっていると考えられる。

要するに、(b)(c)の「出典を明記する」という注解方式の大本分は、希斎自身の手による調査結果ではない。しかし、この点をもって、同書を低く評価する必要はない。これは、先学の俗語研究の成果を踏んだ結果であり、儒者の伝統として、〈たとえ俗語であっても出典を明記する必要性がある〉とする、希斎の見識の現れであるからである。

因みに、この『困学紀聞』巻一九は、『語録解義』

所収の『語録辞義』にも引かれている。すると、『語録訳義』が、直接に『困学紀聞』によったのではなく、闇斎が引用したものを、そのまま転用した可能性も高いと言える。なぜなら、『語録訳義』は、『困学紀聞』からだけでなく、『語録辞義』が引く他書からも引用しているからである。

そこで、次に、(d)(e)の〈他書の注解を引用する〉という注解方式について述べる。そこで、これも鳥居論考より、『語録訳義』が〈注解のため〉引く書名およびその引用回数を抜粋する。そして、『語録辞義』にも同じ解説が見られる場合、鳥居論考より抜粋した引用回数の下に、〔　〕付で、その回数を記す。ただし、『唐話纂要』『字海便覧』『語録解義』『語録字義』などの和書は省いている。

『楽山録』一　『帰田録』一〔1〕
『教坊記』一　『玉篇』三〔1〕
『錦繡万花谷』一〔1〕『古今韻会挙要』二
『五雑俎』三　『広韻』二
『項氏家説』一　『孔氏雑説』一
『皇明通紀』一　『困学紀聞』三〔1〕
『左伝』一　『史記正義』一
『字彙』一二　『字書』一三
『康熙字典』一　『事物紀原』一
『釈氏要覧』一　『朱子文集』一〔1〕
『書言故事』二　『助語辞』一〔1〕
『正字通』一　『祖庭事苑』四〔3〕
『通鑑綱目』一　『通鑑輯覧』一
『通雅』四　『帝図説』一
『程子遺書』二　『輟耕録』一
『典籍便覧』三　『天台三代部補注』二〔2〕
『唐会要』一　『博物類纂』一
『霏雪録』一　『武備志』一
『文苑彙雋』三　『文献通考』一
『文中子』一　『篇海類篇』四
『名臣言行録』一　『野客叢書』一
『酉陽雑俎』二　『容斎随筆』一
『退溪集』一〔1〕　『六一詩話』一〔1〕
『六書正偽』一　『留青集』一
『竜龕手鑑』一〔1〕　『類書纂要』一

この内、『語録辞義』が引く『玉篇』、『帰田録』、

『朱子文集』、および『退溪集』の計四条において、それぞれ、「打」で始まる語について解説している。そして、この中の計十四語についての解説は、『語録訳義』の解説と一致しており、どうやらそのまま『語録訳義』「五画」の項目に転用されているようである。次の「打張」を除く、「打張」から「打不過」までの語がそれである。

打過・打併了・打併掃断了・打不過・打酒・打草・打話・打魚・打船・打車・打水・打飯・打傘・打衣糧・打黏・打量・打張・打試・打掃・打噯・打点・打嚏・打秋風・打畳

『語録辞義』においては、わずか四条の引用が、それぞれが独立した見出し語となり、『語録訳義』においては、十四項目にふくれ上がっている。

このように、希斎の『語録訳義』は、闇斎の『語録辞義』を参考にしている可能性がある。すると、『語録訳義』が参考にした『語録解義』とは、巻末に『語録辞義』を付した闇斎本を指すとは考えられないであろうか。なぜなら、既に述べたように、『語録訳義』は、『語録解義』を基礎とすると述べているわりには、『語録解義』からの引用回数は、『唐話纂要』や『字海便覧』に比べて、あまりにも少ない。しかし、これに『語録解義』巻末の『語録辞義』からの引用を加えると、その引用回数は、計百回を下らず、ほぼ『唐話纂要』や『字海便覧』からの引用回数に匹敵するからである。

しかし、近藤論考も指摘するように、『語録辞義』に見られる記載は、すべて『文会筆録』にも引かれており、あるいは、『語録訳義』は『語録辞義』から転用したのではなくて、すべて『文会筆録』から転用した可能性もあるのである。また、実は、『語録訳義』に、「解云」として引かれる『語録解義』の記述は、『文会筆録』に引かれる『語録解義』の範囲を出ない。つまり、『語録訳義』が『語録解義』を引く場合、『語録解義』から直接引用するのではなく、『文会筆録』からの孫引きのようである。この点を考えると、その他の『語録辞義』からの転用と思われるものも、やはり、『文会筆録』からの転用であるかもしれない。

そもそも、闇斎自身、俗語に通じており、近藤論考によれば、「闇斎が口語に近い語録体の文章をひとり

よく解読利用し得たのは、若き日、禅僧として禅書を広く研鑽したためであろう。（中略）そしてこの体験がそのまま『朱子語類』の解読に役立つたことと思はれる」。

そして、『語録訳義』は、このような師の研究成果をくまなく取り入れようとしている。たとえば、先に挙げた『語録訳義』が引用する宋明の類書や箚記の類は、闇斎の『文会筆録』中にも、多く利用されているものばかりである。また、『語録訳義』は、師説にならって仏書を引き、あるいは「……ハ禅語也」「禅ニ云……ナリ」「禅ニハ……ト云意ニモ使フ」と解説し、闇斎がしばしば引用する『退溪文集』や『朱子書節要』といった朝鮮系統に属す書物からも引用している。要するに、希斎の『語録訳義』は、まさに、こうした闇斎の俗語に関する研究成果を集大成したものと言える。

最後に、『語録訳義』の編纂目的について述べる。既に述べたように、『唐話纂要』は、〈唐話を学習すること〉、『字海便覧』は、〈語録の類の訓読法を知ること〉という、いずれも或る種の〈技術〉の習得を目指している。そして、両書の編纂目的は異なるもの

の、その〈技術〉の習得のため、両書は、いずれも教育的配慮に富み、非常に体系的に記されている。

では、このような冠山の撰述を、あえてばらばらにし、『語録訳義』という形に編集し直した意図はどこにあるのか。その理由として、次の三点が考えられる。

まず、一つには、冠山の撰述が、いずれも検索が困難であるためである。もちろん、だからと言って、直ちに冠山の撰述を不便なものと見なすべきではない。それぞれの使用目的に応じて、その構成が考えられていることは、前章に述べたとおりである。しかし、この難点を克服するべく、『語録訳義』は、先に述べた画数索引という検索方法を採用したのである。なお、『唐話纂要』は、単語を字数別に分類し、やや辞書としての使用に堪え得るが、やはり、画数引きには及ばない。もちろん、画数引きという検索方法は、明代の『字彙』あたりに始まるとされており、希斎の独創というわけではない。しかし、当時の闇斎学派を代表する儒者が、後学の学習の便をはかるため、自己の研究とは別に、このような教育的配慮に富んだ辞書を編纂したことはたいへん興味深い事実である。

さて、もう一つは、従来の俗語研究に、闇斎学派の研究成果を加味するためである。これは、『語録訳義』がしきりに闇斎の『文会筆録』中に引かれる俗語の解説を転用したり、先人が指摘する出典を取り入れようとするなどして、先に述べた〈他書からの引用〉という形になって現れている。

そして、もう一つは、闇斎学派の立場から、冠山を再評価するためである。あるいは、結果的に、そうなったと言うべきかもしれない。青木論考（前出）に、「冠山は決して無識な只一介の訳士では無かった、頭の乾燥した語学者でも無かった。漢学者として一世の重きを為す程の修養と学才とは無かったにしろ、江戸に於て林鳳岡の門に程朱の学を修め経学に関しても一家の見を有してゐるらしい」とある。もちろん、学者としての知名度では、冠山は希斎をはるかに上回る。なるほど、冠山の撰述には、著名な学者がその序跋を記し、いずれも冠山の語学的才能については、皆手放しで称賛するものの、その学才に対する評価は高いとは言い難い。しかし、その卓越した語学力からみて、おそらく、冠山の撰述は、希斎だけでなく、儒者の間でも少なからず利用されていたと思われる。その冠山の撰述を用いる旨を、正面切って「凡例」に明記した点は、まさに『語録訳義』の見識と言えよう。そして、これは、すなわち、冠山の撰述が、儒者の語類研究に資する値いするものであり、ひいては、希斎の冠山に対する評価が並々ならぬものであったことを示している。

おわりに

江戸時代における俗語の研究というと、まず、徂徠学派の名前が挙る。一方、闇斎学派については、ともすれば中村論考（前出）のように「その派は専ら居敬窮理と徳行を重んじて、文章を軽んじた」とされる。しかし、実際には、闇斎学派においても、俗語研究が盛んに行なわれていたのである。近藤論考に、「闇斎は読書に当り、その文義の眼目を把握するをもとより第一としたが、またその文を構成してゐる一字一句の意を把握すべく努力し、字義を苟且にするものでなかった」とある。阿部論考（前出）にも、「〔闇斎は〕、

わが国においては初めて朱子の文集・語類を精密に研究する態度をとり、特にその俗語の解読に注目した」とある。

また、阿部論考は、「わが国の「朱子語類」の語学的研究、もしくは中国俗語の研究は、荻生徂徠の師、岡島冠山の「字海便覧」（享保一〇年大坂刊）をもって最初とすることは定説とみなしてよいことであろうが、その前に山崎闇斎が、李退渓の語録研究の成果に着目し、これを利用したことは注意してよいことであろう」と述べる。すると、次のようなことが言えないだろうか。つまり、〈闇斎と冠山と〉という二つの俗語研究の流れをまとめ上げたのが、他ならぬ、この『語録訳義』であると。

『語録訳義』以後、同書を越えるような、この種の辞書・参考書の類は出現していない。しかし、鳥居論考も指摘するように、『語録訳義』は、増補本という形で、あるいは儒者の立場から、あるいは文学者の立場から、補われている。換言すれば、『語録訳義』が語録読解の手引書としての或る一定のスタイルを確立したと言える。また、『語録訳義』は、〈辞書〉の形態をとりながらも、『唐話纂要』や『字海便覧』のような〈技術〉の習得を目的としていない。山宮雪楼の『語録訳義』「序文」にも、「公（希斎）の学 大にして、此れ（『語録訳義』の編纂） 特ただ其の緒餘なるのみ」とあるように、闇斎学派にとって、俗語研究は、あくまでも語録に書かれた内容を理解するための手段の一つであり、その目指すところは、やはり、朱子学そのものを理解することにあったと考えられる。

注

1　この続編として、「秋水園主人「小説字彙」をめぐって――近世日本中国語学史稿の二――」（『天理大学大学報』Ⅳ－2・一九五四）、「秋水園主人「小説字彙」をめぐって・補遺」（『天理大学大学報』Ⅳ－3・一九五五）、「明治期における中国俗語辞書について――近世日本中国語学史稿之三――」（『天理大学大学報』XⅣ－1・一九六二）、「日人編纂中国俗語辞書の若干について――近世日本中国語学史稿の四――」（『天理大学大学報』Ⅷ－3

・一九五七）がある。

2　『近世漢学者伝記著作大事典』は、その凡例によれば、小川貫道『漢学者伝記及著述集覧』および竹林貫一『漢学者伝記集成』からかなりの資料を得ている。また、『漢学者伝記及著述集覧』は、その凡例によれば、『近代名家著述目録』、『近代著述目録後篇』、『慶長以来諸家著述目録（漢学家之部）』、『先哲叢談後編』、『先哲叢談続編』を中心に、その資料を得ている。一方、『漢学者伝記集成』は、その凡例によれば、『先哲叢談』、『先哲叢談後編』、『先哲叢談続編』、『近世先哲叢談正編』、『近世先哲叢談続編』を中心に、その資料を得ている。

3　鳥居論考は、「〔『語録訳義』は〕、程朱の学に親しむ国人のこよなき参考書として長く需要をもつたと想像されるのである。その間に於て本書の利用者のいくたりかは、それぞれの立場に応じて新語を増し注解に筆を加えて利用価値の増大をはかった。それが今日われわれの見る増補本のいくつかである」と述べる。そして、旭山の増補本に加えて、先に挙げた『唐話辞書類集』第一七集の『俗語訳義』をも『語録訳義』の増補本の一つとして数えている。たしかに、同書は、旭山の増補本ほど完備していないが、なるほど、「淳」と自ら略称する人物の注解と、それを鈔写した富永辰の注解とが増補されている。また、鳥居論考は、この他、天理図書館所蔵のものを挙げ、同書における増補語がすべて『劇語審訳』から採られていることを指摘している。

4　この他、諸目録によれば、たとえば、国会図書館に四本（一本は「語録釈義」、残りの二本は「俗語釈義」と題する）、大阪大学（懐徳堂文庫）に一本（「俗語訳義」と題する）、東北大学（狩野文庫）に二本（一本は旭山の増補本）、二松学舎大学に二本（一本は「俗語訳義」と題する）、無窮会（織田文庫）に三本（一本は旭山の増補本で「語録釈義」と題し、残る二本のうち、一本は「俗語訳義」、もう一本は「俗語釈義」と題する）、無窮会（天淵文庫）に一本（「俗語訳義」と題する）、そして、大阪天満宮御文庫に一本、蔵有されている。

また、長沢規矩也「静嘉堂江戸時代編纂支那語関係書籍解題」（『書誌学』一〇巻二号・昭和一三年）

によれば、静嘉堂文庫に一本（「俗語訳義」と題する）、蔵有されている。なお、同論考は、唐音関係書籍の蒐集者として中山久四郎および石崎又造の名を挙げている。この他、長沢規矩也が蔵有するものについては、長沢規矩也「家蔵江戸時代編纂支那語関係書籍解題」（『支那語学報』二号・昭和一一年）に紹介されている。

5　平論考（前出）は、希斎の俗語に関する撰述として、『俗語訳義』と『語録訳義』とを挙げて、両書を区別して二つの異なる書とみなしている。そして、『大阪名家著述目録』（大正三年・大阪府立図書館）が希斎の撰述として挙げる「俗語釈義、二、写本（延享元年ノ序）」（一七四四）について、「延享元年の作は語録訳義であるから、著述年代は、語録訳義のそれと混同したものかと考えられる」（同論考中は、「俗語訳義」として引用する）と述べる。しかし、既に述べたように、『語録訳義』と内容を同じくする、「俗語訳義」と題する書物が、事実、存在する以上、両書は、やはり、異名の同書ではなかろうか。

6　『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）によれば、旭山の撰述は、『中庸講義』五巻、『旭山初集』一巻、『旭山晩集』四巻、『居業遊説』三冊がある。また、旭山は、闇斎学派の学者の事跡をまとめた『道学淵源録』および『道学淵源続録』を校訂しており、自身も『道学淵源続録増補』巻下に収められている。留守希斎についても、『道学淵源続録』巻四に記載がある。

7　『語録訳義』の「凡例」には挙げられていないが、鳥居論考の指摘によれば、『唐話纂要』『字海便覧』『語録解義』の三書の他に、元禄七年（一六九四）に刊行された『語録字義』（一名、『語録指南』）からの引用も少なくない。同書も、その書名から分るように、やはり語録読解のための手引書である。その序文にも、「群書の要語を抜萃し、各おの其の下に諺解し、後に記誦詞章の楷梯を附して、童蒙に便にす」とある。この『語録字義』も『唐話辞書類集』第八集（昭和四七年）に収められており、巻末には、「素読一助」が付されている。「解説」（『唐話辞書類集』第八集所収）に次のようにある。

初学者の為に、一字至五字（実は六字一語を含

む）部に分け、語句に訓点を加へ、下に双行、漢字交りの片仮名の訳文を注したもの。唐音を注せず、訳語亦こなれてゐないし、ときに誤もある。取材が後代のものの如く日常会話ではなく、語録その他によつたものであらう、純粋の俗語らしからぬものが少くない。何れも、唐話出版の初期のものであるから、やむをえないともいへよう。寛文一一年、洛下の濫吹子の刊行の序文に、「語録指南序」と題するため、語録指南といふ書名で著録してゐる目録もあるが、同一書である。その序によると、友人が携へ来つて示したものとあるので、濫吹子の著ではない。

8　『唐話纂要』についての「解説」（『唐話辞書類集』第六集）に、『唐話纂要』中、各語に付された中国音は、すべて江南音を指すとある。青木正児「岡嶋冠山と支那白話文学」（『青木正児全集』第二集「支那文藝論藪」所収・昭和四五年・春秋社）も「冠山の支那語は南方の音であった事はたしかだ。室町以来支那との交通の行はれた地方は主として南方の福建杭州辺であつたし、今彼の著書に就て見ても南方音と断定出来る」と述べる。

因みに、日原伝「岡島冠山と朝鮮通信使――正徳元年十月晦日の唱酬を中心に――」（『季刊日本思想史』第四九号・平成八年）によれば、朝鮮通信使との対談において、「冠山は「南京話」、〔朝鮮通信使の〕昌周（姓は鄭）は「北京話」を口談している。当時、長崎の唐通事は「南京話」「福州話」「漳州話」などについて各々専門の通事がおり、各地の方言にも通じていたらしい。ただ話されるのは中国南方の言葉であって、北京語はほとんど話されたことはないという。……一方、朝鮮からは昌周自身が述べているように北京へ陸路交通が通じており、当然北方の言葉が主流となっている」とある。

9　『唐話辞書類集』第六集所収の増補本『唐話纂要』の最終巻である巻五は、いわゆる単語帳的な、役割を果している。たとえば、「親族」として「玄祖」「曽祖」「祖父」などの単語を列し、「器用」として「器皿」「盒児」「香盆」などの単語を列するなど、以下、「畜獣」「虫介」「禽鳥」など、計十三の項目を挙げ、それぞれに属する単語（名詞）を〈類書〉

的に列挙している。そして、『唐話纂要』の巻一から巻四までと同様に、各単語の傍らには片仮名で中国音を、下には和訳を記している。そして、さらに、この巻五の巻末には、中国音を付した時調（流行歌）にも収められている。

10　岡島冠山に関する先行研究には、石崎又造『近世に於ける支那俗文学史』（前出）の他に、たとえば青木正児「岡島冠山と支那白話文学」（『青木正児全集』第二集「支那文藝論藪」所収・昭和四五年・春秋社）や潟沼誠二「岡島冠山研究（一）－（四）」（『国語国文研究』四二・四五・四九・五〇）がある。潟沼論考は、現在、『儒学と国学――「正統」と「異端」との生成史的考察』（昭和五九年・桜楓社）に収められている。最近のものでは、奥村佳代子「岡島冠山『唐話纂要』考」（『関西大学中国学会紀要』第一七号・平成八年）がある。また、岡島冠山の通事しての具体的な実績については、日原伝「岡島冠山と朝鮮通信使――正徳元年十月晦日の唱酬を中心に――」（『季刊日本思想史』第四九号・平成八年）がある。

11　石崎又造「京坂に於ける支那語学の展開」（前出『近世日本に於ける支那俗語文学史』所収）は、冠山の京坂における事跡については甚だ不明瞭ではあるものの、京坂においてもまた、冠山は、唐話の流布者であり指導者であったとする。そして、江戸では単なる一時的な唐話流行に過ぎなかったが、京坂においてはさらに進んで小説戯曲の解読を誘致し、翻訳翻案等の企画となり、国文学への影響が深められていったと述べる。また、『先哲叢談後編』巻三にも、次のようにある。

近世　稗官の学を以て世に鳴るは、晁世美・陶冕・岡白駒・秦熙載等。皆冠山を以て之が先鞭と為す。

12　『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）によれば冠山の撰述は、『華音唐詩選』七巻、『指日』一巻、『四書唐音辨』二巻、『小説読法』、『唐話纂要』六巻、『唐訳便覧』五巻、『唐音雅俗語類』五巻、『唐話便用』六巻、『太平記演義』五巻、『尺牘辨解』五巻、『経学字海便覧』七巻、『三体詩唐音』二巻、『通俗忠義水滸伝』二〇巻、『康熙帝遺詔』一

巻、『通俗明清軍記』、『通俗元明軍談』、『唐音二体詩』三冊、『唐音和解』一巻がある。

13 鳥居論考は、実際に『語録訳義』と『唐話纂要』とを比較し、〈『唐話纂要』からの引用である〉という但書きはないが、その解説が『唐話纂要』の記述と一致する語は、計二百三十語あり、また、明らかに『唐話纂要』を参考にしたと考えられる語は、計六十六語あると述べる。なお、『字海便覧』および『語録解義』については、氏の手元にこの両書がなかったため、同様の調査が行なわれていない。

14 『語録解義』所収のものと、『唐話辞書類集』所収のものとを比べてみると、一部、文字の異同があるものの、同一の内容である。しかし、分量的に、前者は後者の前半約四分の一に当たる。先の「右、『常話方語』、浅見先生ノ雑記ヲ以写ス」という識語は、『唐話辞書類集』所収『常話方語』の、まさに、前半四分の一を終えたところに明記されている。

また、『唐話辞書類集』所収の『常話方語』には、以下、「「叟」字自り此に至るまで浅見先生訓ず」、「右、丁丑（一七五七）四月、浅見先生物語するなり」、「右、同月宵に録す　進居」、「「恪」以下乙酉（一七六五）晩冬廿三日夜、語類会に箚記す」という識語がある。「進居」は、絅斎の弟子の若林強斎（延宝七年－享保一七年、一六七九－一七三二）の名である。

これらの識語から、『常話方語』が、絅斎を中心として開かれた『朱子語類』の勉強会の記録を含んでいることが分かる。したがって、同書は、絅斎の言説を集めたもので、正確には絅斎の〈著述〉であるといえないものの、絅斎の俗語に関する理解を示す貴重な資料である。なお、近藤論考も指摘するように、この勉強会の宝暦二年（一七〇五）の規約文である「語類会約」が残っており、『絅斎先生文集』巻八（『近世儒家文集集成』第五巻所収・昭和六二年・ぺりかん社）に収められている。

15 「汪徳夏」については、近藤論考も指摘するように、『羅山先生文集』巻九「書八」の「与汪徳夏」の題下に、「大明国辺鄙の賤き者なり。流落し東武に来りて脇坂淡路守に餬もらい、書を写して以て業と為す。頗る文字を知る」とある。

16 『江戸時代書林出版書籍目録集成』（慶応義塾大学附属研究所斯道文庫・昭和三七－三九・井上書房）に収められている延宝三年刊・天和三年改修本『新増書籍目録』の下巻、および、元禄九年本『増益書籍目録大全』の巻四、同宝永六年増修本の巻四、同正徳五年改修本の巻四に、それぞれ「語録解義」と題する書の記録がある。ただし、天和三年改修本『新増書籍目録』、および、元禄九年本『増益書籍目録大全』において、『語録解義』は、「儒書」ではなく、「仏書」に分類されており、あるいは、同名の異書であろうか。

17 内閣文庫所蔵の『語録解義』には、この延宝八年および貞享四年の識語はない。なお、新編『帝国図書館和書目録』によれば、国立国会図書館も「語録解義」と題する鈔本を一本、蔵有し、同目録は、「林信勝（羅山）著」と記している。石崎又造が挙げる、識語のある『語録解義』は、あるいはこの国会図書館所蔵のものか。また、補訂版『国書総目録』によれば、この他、日本大学、高知大学がそれぞれ一本ずつ、『語録解義』を蔵有している。

18 闇斎の撰述については、阿部吉雄「山崎闇斎の著書に就いて（一）（二）――主として朱子学関係書の略解――」（『漢学会雑誌』巻一第一号・第二号、昭和八年）を併せて参照されたい。ただし、同論考は、『語録解義』について、「未見、恐らくは闇斎の編著ではなく又その考訂に出づるものだと言ふ証拠もあるまい。（中略）語録解義は文会筆録中に屢引いてゐる所のものである」とだけ記す。

19 なお、「再編集」と言っても、『語録解義』を、現在のような三部構成にまとめという意味ではない。なぜなら、それは、明らかに羅山や闇斎よりも後の人の手による仕事であるからである。たとえば、闇斎本について考えるならば、『語録辞義』の前に付されている『常話方語』は、既に述べたように、絅斎の弟子が編集したものであり、闇斎が孫弟子の編集を待って、弟子の撰述の後に自著を付すとは考えにくい。そもそも絅斎がそれを許さないであろう。このことは、羅山本についても、羅山の生卒年から見て、やはり同じようなことが言える。

なお、闇斎本を三部構成にまとめた後人は、識語

に「山崎氏。」と記していることから、闇斎学派の人間ではない可能性がある。なぜなら、たとえば、希斎が『語録訳義』に先人の説を引く場合、単に「荻生氏」「伊藤氏」と書くのに対して、必ず、区別して「闇斎先生」「浅見先生」「尚斎先生」と敬称を付けて呼んでいるからである。また、羅山本も、冒頭に「林氏編」とあり、本文中も、『羅山先生文集』（前出）では「先生」となっているところが、やはり「林氏」となっている。

しかし、本稿がここで問題としているのは、〈誰が原著『語録解義』を再編集したか〉ということであって、〈誰が『語録解義』を現在のような三部構成に再再編集したか〉ということではない。あるいは、『語録解義』は、初めから三部構成で刊行されており、羅山も闇斎もその編集に関わっていない可能性もあるが、このことは、初版本『語録解義』およびその刊行年を確認しなければ分からないことである。

20　『語録解』は、現在、国立国会図書館支部の東洋文庫に木活字本『語録解付藝海珠塵駢字分箋』（朝鮮南二星・宋浚吉編・朝鮮刊・木活字本）が一本、同じく東洋文庫の、鈔本『語録解義付五才子書語録』（朝鮮南二星・宋浚吉編）が一本、蔵有されている。また、『和漢図書分類目録』（昭和三〇年・宮内庁書陵部）によれば、宮内庁書陵部も『語録解』を一本、蔵有する。また、『語録訳義』同様、楠本正継の家蔵本を底本とした油印本『語録解』（昭和二九年・九州大学中国哲学史研究室）がある。なお、この油印本は、巻末に画数引の索引を付し、巻頭には『退渓文集』から李退渓の俗語に対する解釈を摘出し、採録している。また、巻末には、索引を付し、検索に便利である。この他、朝鮮版『朱子語類』の景印本（中文出版社。ただし、同社による奥付がなく、また解題もないので、その底本については未詳）の巻末にも、『語録解』の鈔本が収められている。

21　鳥居論考は、「〈『語録訳義』は、〉画引というこの方面の述作としては画期的な検字方式がとられている」と評しているが、『語録訳義』は、部首別に分類した後、画数順に並べるいわゆる字書ほど機能的ではない。また、頭字に異体字を用いたり、頭

字の画数の数え方に困難なものもある。そこで、鳥居論考によれば、氏には、「俗語訳義語彙」という、『語録訳義』の全語彙を注音符号順に配列したものを作成したようである。ところが、「鳥居久靖教授著作目録」（鳥居久靖先生華甲記念論集『中国の言語と文学』・昭和四七年・天理時報社）には、「俗語訳義語彙」という論考ないし単行本は見えない。ただ、油印『俗語考原語彙』（一九五四年・天理大学中国学科研究室）という、李鑑堂『俗語考原』の語彙を注音符号により配列したものがある。また、鳥居久靖「近代文学語彙研究資料（その一）」（『明清文学言語研究会会報』八号・一九六七）において、程万里『大明春』巻一の中の俗語解説を、発音順に配列し直している。

22　鳥居論考は、『語録訳義』の注解方式に一貫性がない点をもって、『語録訳義』は『俗語解』と似ているとし、後者を〈俗文学の辞書〉として、前者を〈語録の辞書〉と定義している。また、鳥居論考は、両者の内容を比較した結果、『語録訳義』が解説のために引用した書物が、『俗語解』における引用書とほとんど重複しないことから、「「俗語解」の引用書が当時のいわゆる唐話学者の一般的読書傾向を示すものとするならば、本書（すなわち『語録訳義』）の引用書は儒者たちのそれを示すものと言い得ないだろうか」と述べる。

付録

	採録文字	語録解義	語録解
1	也	亦也。	語辞、又……、眉訓、亦也、猶也。
2	撩	扶也。	……。○又扶也、取、又理乱日撩理。
3	他	彼也、又也、実也。	……、又……、眉訓、彼也、又某人也。
4	恩	溷洞也、薦挙也。	（なし）
5	矍	左右驚顧、一云、視遽貌。	左右驚顧、又視遽貌。
6	似	向也。	向也、眉訓、亦於也、古詩云、去国一身軽似葉。
7	棼	乱也。	（なし）
8	生	語辞。	語辞。
9	掴	批也、又也也。	音……、手打也、批也。
10	羨	善也。	（なし）
11	做	工夫成意作也。	作也、又工夫成意。
12	跟	足踵也。	音根、足踵也。○又追随也。
13	恨	悲也、又眷々貌。	音両、悲也、又眷眷貌、又音朗、不得意。
14	直	正也。	……、又……。○物価……。
15	争	何也。	……、又有事之謂。○……。
16	貼	付也。	……、俗所謂補貼亦此意。○貼将来……。
17	将	持也。	……、眉訓、持也。
18	麼	乎字意。	語辞。
19	蹋	跌也、行失正貌、又飛動貌。	音唐、平声、跌之也、頓伏貌、行失正貌、又飛動貌、又搶也。○見平声、……。
20	在	語辞、有在意。	語辞、有在意。
21	輥	車轂斉等貌。	音混、車轂斉等貌。
22	捽	持頭髪也。	（なし）
23	要	求也、欲為也。	求也、又……、又……。○音見平声及去声。要約〔也〕、勤也、〔固〕要也、察也、以上平声。久要也、〔枢要也〕、要会也、欲也、以上去声。
24	些	少也。	（なし）
25	却	在句末者、語辞、又旋也、埋却殺却。	語辞、又……、又……、眉訓、還也、其在末句者語辞。
26	撞着	丁也、当也。	……、又……、眉訓、衝着也。
27	鋸	解截也。	（なし）
28	下	猶言措置。	音……、下字言……、字……、下手……、下工夫亦同。
29	零細	猶言瑣細也。	猶箇箇也。
30	嗑着	逢 一 。	……。○易序卦、嗑者合也、即是……之義、又嗑当作磕、有撞合之義、磕頭謂之……。
31	霎	音揷、少頃也。	音……、少頃也、小雨也。
32	従来	自古来今也。	……。
33	従前	与上同。	……。
34	恁地	猶言如此。	……、猶言如此。○……、又……。
35	由来	従来同。	従来同。
36	摸落	擺 一 。	（なし）
37	従教	任他所為也。	……。
38	任教	与上同。	与任他之意相近、教有教使之意、為語助、下同。
39	什麼	何事。	与甚麼同。
40	伊麼	彼也、此也、何也、奈也。	……、又……、又……。
41	怎麼	何如。	……。
42	厮鬪	戦也。	……、恐此亦知是相鬪之意。
43	打空	漫意也。	……猶言……。
44	撰来	成来也。	……。
45	一搽	一般也。	……、音茶、……。
46	一遭	一番也。	……。
47	一串	一貫也。	……。○……。
48	一介	一方同。	（なし）
49	一遍	同。	……。
50	一般	一様。	……、又一種。

付録

	採録文字	語録解義	語録解
51	一段	一塊。	……、猶言一片也。
52	一面	一方。	……、又……、又……。
53	一向	正 一 、直 一 。	……。
54	一等	猶言一種人。	……、又……。
55	一副当	一件也。	一件也、溪訓。
56	笑殺	一 頓。	……、欧陽公詩曰、笑殺汝陰常処士、十年騎馬聽朝鷄。
57	物事	語辞。	事、語辞、如今数物、必曰、一事、二事。
58	地頭	地末。	……。○猶言本地也。
59	上頭	上首。	……。○……。
60	裏頭	内首。	……、又……、猶中也、頭語辞。
61	到頭	猶言到終。	……、眉訓、到極也。
62	若為	何為。	……。
63	関子	語辞。	関子、公文書也、子、語辞、如扇子、亭子之類。
64	忽地	奄 一 、忽。	……。
65	遮莫	遮、音折、猶言尽教也、又蓋置也。	遮、音折、猶言尽教也、……、遮、一作折。
66	打破	打棄也。	……、溪訓。
67	截断	止也。	……。
68	惺、	至明貌。	……。
69	肚裏	腹内。	……。
70	灑、	浄也。	（なし）
71	撈到	皆来也、往也。	……。
72	這箇	於是也。	……、又……。
73	落、	高貌。	○灑落浄潔之意、灑灑亦同此意、又……。
74	自是	渠如前為也。	……。
75	上面	上辺。	……、外面、裏面、前面、後面、皆以此意推之。
76	許多	万也、幾也。	……。
77	胡乱	漫擾貌。	……、溪訓、又……。
78	提撕	執持也。	……、眉訓、提而振之也。
79	骨子	指当物也。	猶言……、指当物也、如言……。
80	賺過	過為連着也、亡重買也。	賺音湛、以軽物買重物曰賺心、経所謂賺以大学不欺章連小人間居之章者也。
81	些子	小貌、乍貌。	……、又……。
82	放下	棄也。	……。
83	直下	直指下。	……。
84	話弄	漫意来往。	（なし）
85	自家	我也。	……、亦云我也、指彼而称自己曰自家。
86	那裏	彼者、何処。	……、又……、眉訓、一彼処、一何処。
87	合当	相応貌。	……。
88	下夫	下手也。	下手也、恐与下工夫同。
89	未曽	暫未也、曽者曩也。	……、又曽……。
90	定疊	安頓也、疊亦定字意。	安頓也、疊亦定意、眉訓、堅定。
91	卜度	尠酌也。	……。
92	逐旋	乾貌。	……、又……、又……。
93	攔	遮也。	遮也。
94	如	直指貌。	……、猶今郷人有所歴挙則必由……也。○……、又……。
95	惹	乱也、佳也、又引着也。	乱也、又引着也。
96	消詳	仔細也。	仔細。○猶言須用詳細也、漢語消与須同義。
97	闌珊	彫散貌。	餘残欲尽之意、又意思彫散貌。
98	多少般	与幾多般同。	幾多般同。
99	知多少	某人遊而幾多也。	……。○唐詩〔花落〕知多少亦此意。
100	禁忌指日	猶偽学之貌。	猶偽学禁目。
101	撑眉怒眼	指禅学者。	指禅学人。○作気貌。
102	作麼生	如何、又何事。	……、又……。○……。
103	担板漢	汝担而人謂一面謂不見一面。	……、謂見一面不見一面。

付録

	採録文字	語録解義	語録解
104	生面工夫	日新做功。	……、工夫。
105	閑説話	漫而説話。	……。
106	担閣	猶言揮棄也。	……、不行貌、又一説……、眉訓、揮棄也。○……。
107	直下承当	正而的当。	……、又……。
108	招認	其人為而自説手。	招如今……、認引以為賦誣。
109	了	知也、卒也、事畢也。	語辞、又……、又……、眉訓、在末句者事之已畢為了。
110	着	有為也、倚着也、又使也。	猶言為也、又……、又……。○語辞、又使也。
111	作	為也。	為也、亦語辞。
112	夯	音向、担也。	音向、担也。
113	窟一	音窟也、始為穴也、南陽人呼穿土為窟、亦窟也。	（なし）
114	獃	音垓、癡也。	音埃、癡也。
115	錯	誤也、非也。	……、又……。
116	来	語辞也、有来意。	語辞、有来意。
117	才	与纔同。	与纔同、又……。
118	弶	与强同。	（なし）
119	去	語辞、有去意。	語辞、有去意、眉訓、舎此事為彼事之意。
120	便	即也、又仮使也。	……、又……、又私伝如風便是也、眉訓、即也、又因人寄書謂之便。○音見平声及去声。安也、習也、便便言也、肥満也、溲也、以上平声。利也、宜也、順也、便殿也、以上去声。
121	撒	音殺。	音煞、……、又音散、散之之貌。
122	頭	直也、末也	……、語辞也、語端皆云頭。
123	你	汝也	汝也、眉訓、爾也、音……
124	管	領得也。	主之也、……、眉訓、総摂也。
125	挨	推也。	音埃、推也。○按次謂之挨次。
126	較	適而両物相比而差也。	……、直也、不等也、相角也、対両而計其長短、又……。
127	肛	音紅、飛也。	（なし）
128	捏	止也、又来之意。	……、又……、又……。
129	渾	皆也。	……、猶言全也。
130	没	無也。	眉訓、無也。
131	儘	任也、又極也。	任也。○……。○……。
132	僕	人也。	（なし）
133	合	的也。	……、又……。
134	滅	消也。	（なし）
135	線	音善、細糸。	（なし）
136	箚	触也。	音……、刺着也、……。○唐人奏事非表非状者謂箚子。
137	抹	末也、又破棄也。	……。
138	底	極処也。	当処也、或作的、又……、又根底也、又与地同、又語辞。
139	解	知也、能也。	……。○解粮、解銀、押解、皆輸到卸下之意也。
140	拐	伐也、折也。	……、又……、俗析字。
141	漫	無聊意。	……。
142	得	語辞、又賓意、有得意。	語辞、又……、有得意。
143	会	和解也。	……。○……謂之一会二会。
144	恰	合是也。	……、眉訓、適当之辞。
145	鎮	恒也、長在貌。	……。
146	那	彼也、何也。	……、又……、眉訓、彼也、又……。
147	澌	即澌字。	（なし）
148	還	語辞、有却意。	語辞、又……。○……、又……、又……。
149	煞	与殺同。	与殺同、……、音……。
150	差	不等也、与較同、相角也。	……、与較同、又差出之意。
151	遞	公伝。	公伝也、附遞伝書謂之遞。○納也。

付録

	採録文字	語録解義	語録解
152	箇	語辞、又介也。	語辞、有一箇、二箇之意。
153	交	交付也、与教同。	交付也。
154	捺	乃曷切、又手接也、又壓也。	乃曷切、捎也、又手按也、……。
155	便	私伝也、便中、便人、便風、皆一語也。	（前出）
156	般	一也、与搬同。	……疑誤……、又……。○一般二般之般也。
157	按	下也、考也、禁也。	下也、又考也、又禁也。
158	訣	別也、辞也、永別之辞。	絶也、又別也、又辞也。
159	靠	音告、憑也。	音告、憑也。
160	和	從也、別本合于本物曰和、又答。	猶言……、以別物合此物曰和、……。
161	免教	避也。	……、又……。○此教字、疑或語辞。
162	閑	遊也、等閑謂不緊無益。	……、又……、又……。
163	怎生	何也。	漢語怎、何也、生、語辞、……、眉訓、何也。
164	摺	音揲、折也。	音……、又……、眉訓、……。
165	研	究窮。	磨也。○窮也、……。
166	解	脱棄也。	（前出）
167	依前	上同。	……、又……。
168	甚麼	心也。	……、眉訓、何等。
169	争奈	彼然而我何也。	……。○……。
170	横却	斜衝也。	……。
171	委意	知貌。	……。
172	点検	審察。	……、又……。
173	只管	乍而領得也。	……、又……。○……。
174	都慮	皆而置也。	……。
175	照領	昭管同、審而領悟。	……。○猶云照数次知也。
176	伶利	分明也。	……、眉訓、分明也。
177	的当	合当意。	合当之意、猶言……。
178	主張	張去意。	……、自主己意而張皇之、猶……。
179	巴鼻	頭尾也、又倚着也。	……、語類、没巴没尾、未詳。○漢語禽獸之尾謂之尾巴、此謂巴即尾也、鼻即頭也、似是無頭無尾之蠡、又一説大蛇謂之巴曽也、漢人遇大蛇用小箠一打其鼻便死、所謂巴鼻、恐是要切処之意。
180	揍合	一 会也。	……、又……、揍当作湊○猶言輻輳也。
181	拈出	執 一 。	……。
182	直饒	仮使任其所為也。	……。○仮使之意也。
183	知道	識也。	……。
184	単提	稜之貌。	……、眉訓、独挙也。
185	特地	各別也。	各別也、又……、漢語……、又特別……。
186	卓午	日中也。	……。○日中也、猶言晌午也。
187	獃丶	如此迷惑。	……。
188	巴頭	異巴歌、不用之歌、異不明之歌。	（なし）
189	替你	汝而 一 伐也。	（なし）
190	腔子	猶躯殼子。	躯殼。
191	体当	猶言体験甚当。	如云体得、体験、堪当。
192	揩背	脊 一 也。	……、揩、猶言撫摩之意。
193	索性	猶言窮源也。	……、渓訓。○猶言白直、又猶言直截、又……。
194	僬僥	短小人也。	短小人。
195	公案	官文書。	……、渓訓。
196	谷簾	廬山瀑流散為簾也。	廬山瀑沛散流如簾。
197	下稍	終也。	……、渓訓。
198	親事	昏事也。	婚事。
199	収殺	畢終也。	……、畢終也。
200	末稍	亦終也。	与下稍同。
201	即当	散潤也。	舞態也、反復不正之貌、猶俗言……、猶狼藉也。
202	胖合	夫婦各半体合為合下初也。	夫婦合半体合為一也。
203	頓放	安置也。	……。
204	拆号	考官開見挙子巻号也。	……、又傍……。

付録

	採録文字	語録解義	語録解
205	敦遣	州郡勧送之意。	（なし）
206	鐫戢	猶言鐫除。	（なし）
207	放着	亦置而安也。	……。
208	彊輔	益友也。	直諒友朋也。
209	郷上	言向道。	郷、向也、上、形而上之上、謂天理也、言向道理。
210	津遣	道路資送之意。	道路資送之意。
211	過着	已為也、着有過之意。	已為也、着字有過意、又与消同、猶言……。
212	醍醐	酥之精液養成性令人無心。	酥之精液養性能令人無妬心。
213	分疎	猶発明也。	猶発明也、溪訓。
214	推鑑	穿也。	穿也、鑑也。
215	地歩	地頭也。	頭也、又地也。○猶言里数也。
216	使臺	監司兼風憲。	監史兼風憲。
217	倀丶	無見貌。	失路貌、音長、又見敬韻。
218	不托	餅也。	或作餅飩、……之類。
219	解額	解使遣之意。	秋囲郷試之額数也。
220	下落	猶帰宿也。	……、猶帰宿也。
221	下平	一 長貌。	（なし）
222	儻佪	猶含糊。	猶含糊、又溪訓、不分明也。
223	胡写	乱書也。	乱写也。
224	除是	但也。	……、除是人間別有天、是……除……人間各別……天……、又……。○猶言須是也、又俗称除是非之語。
225	何曽	何如。	……、又……。
226	閑汨薑	朽木也。	○間、間漫也、汨薑、南人雑魚肉置飯中謂之汨薑羹、謂雑乱不切之事也。○漢語汨従木間相薑猶朽株樹也。
227	除非	未有不如此而能者也。	与除是同、又……、又只是之義也。
228	較些子	小而展貌。	……。○……。
229	骨董	飲食雑烹之羹、一一羹雑也。	雑也、義見三字類。
230	幾多般	幾何持也。	……。

この一覧表は、闇斎本『語録解義』と語彙数の最も多い木活字本『語録解』とを底本としている。表内に「……」と記す箇所は、ハングル表記の部分を略記したものである。なお、「溪訓」とは、李滉（退溪）の注であり、「眉訓」とは、その弟子の柳希春（眉巌）の注である。